
ネギの弟は神様候補！

アズナブル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギの弟は神様候補！

【Nコード】

N3190P

【作者名】

アズナブル

【あらすじ】

主人公は現代に近い世界に生きる少年。ただ普通と違い十二神将とよばれる神様達と一緒に暮らしていた。十二神将は家族として楽しく暮らしていたが、主人公は死んでしまい死んだ後、最高神に神の素質があるから神になってくれと頼まれたが、主人公はもう一度人生を楽しみたいから転生させてくれと条件をだした。それが承諾され転生した先はネギま！の世界のうえ、ネギの双子の弟として転生した。

十二神将は少年陰陽師の十二神将です。

プロローグ 始まり（前書き）

ガンダムの息抜き作品です。

プロローグ 始まり

「ここはどこだ？」

おお、起きた

「あんた、誰だ？」

最高神

「で、死んだら皆あんたに会うのか？」

いや、おぬしじゃけじゃ、おぬし下界では十二神将と呼ばれてる神々と暮らしておったじやろう？

「ああ、それやばいのか？」

いや、お主は神の素質があるから、神である十二神将を認識し、話が出来た。

「で、素質があるから神になれと？」

まあ、そうじゃな

「条件があるが、それを飲めばいいけど」

なんじゃ

「神になれるなら、その神の力を持ったままもう一度だけ人間の人生を送っていいか？」

おぬしが生きていた時代は愚か、生きていた世界でない世界で人生を送るがいいのか？

「それでいい、それと、十二神将たちも連れていっていいかあいつら家族だから？」

いいじゃろう、他になにか力が入らんか？

「世界の自然に干渉できる力かな。俺の神の力どんなのだ？」

それは、わしにもわからん

「そうか、まあ、あいつらとまた一緒に暮らせるならどんな力でもいいか」

本当に大切にしとるんじやな？

「当たり前だ、両親がいない俺と死ぬまで一緒に暮らしんたぞ」

そうか、あいつ等が気に入るわけじや

「ああ、それと神になるという記憶は消してくれないか？」

それはかまわんむしろ消すつもりじゃった

「そうか、今の俺の前世である今の記憶も消してくれないか？」
注文の多い奴じゃ、まあ、ええじゃろう、ゆくぞ！

俺は意識はそのまま消えた。

おぬし等も、ついていってやれ

「「「ああ」「」」

「「「「はい」「」」」

「「わかった！」」

「ええじゃろう」

1話 闇の福音

午後3時

電車のドアが開く、俺は電車を出てた。

「ここが麻帆良か・・・」

神具で作った自分の分身を学園長の挨拶に行かせた。

麻帆良の事を細かく調べたら、15年前に死んだはずの闇の福音の目撃情報があった。

15年前といえば父であるサウザンドマスターがちょうど麻帆良に滞在した時期でもある。

学園のサーバーに侵入して、生徒名簿を見たら闇の福音である、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが生徒として学園に通っていた。

よく調べると15年も中学1年〜3年を繰り返している。

何かやな予感がした為、先にこっちから会いに行こうと思った。

この情報をもとに学園長の性格を分析したところ本能が信用するなと訴えたため、

学園長の挨拶は分身に任せた。

今頃、タカミチさんに案内されてることだろう、なにかあっても神将最強の騰蛇が付いている、
騰蛇一人でこの学園を落とせるので争いになっても大丈夫だ。

俺はエヴァンジェリンの住処までやってきた。

呼び鈴を鳴らす、出てきたのはエヴァンジェリンと同じクラスの茶々丸が出てきた。

「どちら様でしょうか？」

「ナギサ・スプリングフィールドです、エヴァンジェリンさんはいますか？」

「少々お待ちください」

茶々丸さんは家の中に戻った。

「マスター、ナギサ・スプリングフィールドと名乗る少年が着てますが？」

「なに、スプリングフィールドだど！？」

奥の話し声は風で俺の床まで運んだため、会話は聞こえる。

ダン、ダン、ダン

奥からエヴァンジェリンが来た。

エヴァンジェリン Side

ジジイからナギの息子達が魔法学校を卒業し、来年この学園に教師として赴任してくると聞いたが、いきなり今日やってきた。

渡された情報によると、魔力は最低クラスだがコントロールはずば抜けてる。

成績は魔法意外はトップで、魔法関係はビリだと知らせは受けた。

私の登校地獄をとく鍵は兄のほうが役に立つと考えた。

しかし、気になる情報もあった、最近マホネットで人気が出ている魔法を強化するアクセサリーの製作者がこのナギの息子であるという情報があった。

私も一度、購入したが、魔法の威力が3割から5割までアップした、7〜11回ほど使うと壊れるが、それでも破格な効果だった。

あれのおかげで魔力も節約できた、厄介なのが人気でなかなか手に入らないことと、値段だ、最近になって購入者が増幅し、もはやオークション状態だ

った。

そのナギの息子が私のところにきた。

第一印象は魔法使いとしては最弱。

「始めまして、エヴァンジェリンさん、俺はナギサ・スプリングフィールドです、貴方に聞きたいことがあるんですが？」

「なにが聞きたいんだ？」

こいつの印象は役に立たない立ったが

「15年間この学院に通ってるのは父と関係してるんですか？」

「なぜ、そんな事を聞く？」

「この学園に赴任する事になったので、この学園の事を調べたら、15年前に死んだと知らされてる貴方が目撃されている情報がありました、それで学園の生徒名簿をみたら貴方の写真が移っていたため、

不審に思い、よく調べたら15年も学園に通っている事実を見つけました。

くわえ父が15年前にこの土地に来ていた噂もありましたから、父がなにか関係しているのか聞きたかったんです」

こいつがこの学園に赴任する事が決まったのは昨日だぞ？

そんな短期間にそこまでの情報を得られるのか？

「貴様がこの学園に赴任する事に決まったのは昨日だろ、どうやって調べた？」

「簡単ですよ」

ポケットから円形6cmの鏡を持ったら、こいつと全く同じ姿をした偽者が現れた。

「こうやって、分身を作り、彼らに調べさせたんですよ、ちなみに学園長に挨拶をしているのも分身です、俺はこの分身と知識は共有してるんですよ、分身が消えたら彼らが蓄積した経験も俺のところに蓄積されます」

「そんな魔法具は見たことも聞いたこともないぞ!？」

私が驚く中こいつはアッサリと

「ええ、だって俺が作った神具ですから」

「貴様が作ったのか？」

ジジイから渡された情報よりとんでもないものを作れるようだ。

「待て！魔法具じゃないのか？」

今こいつは神具と言った。

「はい、これは神の道具、神具です」

神だと？たしかに今の分身とその効果は出鱈目だった。

「俺は魔力は殆んどありませんが神気はあるんです、神気は魔法使いは感知できないみたいです」

「貴様は神と契約でもしたのか？」

神話などで神と契約した人間がまれにいと語られたが、実際に見たことがない、それに情報すら待ったない。あつたとしても似非情報として無視される。

「十二神将、十二天将と呼んだほうが解かりやすいですかね、彼らとは生まれた時からの付き合いです、もつとも実体化しない限り、俺以外には見えないです」

十二神将といったか！？

「太裳、勾陣実体化してくれ」

そういうとナギサの後ろに男性と女性が現れた

「く・・・!？」

女のほうの威圧感は半端じゃない、全盛期の私でも手も足も出ないだろう。

「こら、勾陣、殺気をだすな」

「いや、これは済まんナギサ、吸血鬼がどのような反応するか興味があってな、それにお前が私達のことを他人に話すのは初めてだろう? だからついな」

「まったく、趣味が悪いですよ、ナギサ様が困るのを見る所は母親みたいですわね」

「なんか言ったか、太裳？」

勾陣が太裳に殺気を放つ、こっちにもその余波が来る。

「さて、やばい空気なので神界に戻ります」

「待て！」

二人とも消えた

「・・・はあ、はあ・・・」

「すみません、少し悪ふざけがすぎたみたいです」

私は勾陣の殺気の余波で息を切らしたのに、ナギサは平気な顔をしていた。

「貴様はなんともないのか？」

「はい、なれてるんですよ、なんせ彼ら直々に俺を鍛えてくれましたから」

神将達に鍛えてもらった？

「くく、はははは、ナギに劣らず化け物か貴様は？」

「む、父と一緒にしないでください？」

「なんだ、ナギと一緒にされたくないのか？」

「当たり前です、死んでいるなら文句は言いませんが、生きてるのに育児放棄ですよ、そんな男と一緒にされたくないですね」

「なっ、生きてるだど!？」

「はい、兄さんが6年前に父から直接、杖を貰ったと言いつらして

ました」

「そうか、いきてるのか、くくく、ははははははは」

「マスターがあんなに嬉しそうに笑うなんて」

「それで、父と何があったんです？」

「そうだったな、話の腰がおれたな、私はナギに登校地獄の呪いをかけられたんだよ、
奴は三年後に解くといったが、戻ってこないまま、死んだ情報がきたんだよ」

「それで、15年間も学園に？」

「ああ、全く忌々しい」

「その呪い、俺が何とかしましょうか？」

「神気とやらでなんとか解けるのか？」

「解くんじゃなく無効化は出来ます」

「無効化だと!？」

「はい、神具で呪いやこの学園の結界の効果を無効化する神具を作つてあげます」

「そんな物も作れるのか? いや待て、学園の結界の効果だと?」

「エヴァンジェリンさんの魔力低下は呪いではなく、学園の結界のせいなんです」

「ちい、やっぱり学園の結界が関係していたか、忌々しい」

うすうす感ずいていたが、ジジイの奴は何も言ってこなかった。

「それより、本当に無効化できるのか？」

「はい、神具の効果は——」

一、マイナス効果をもたらす魔法および、呪いの無効化

二、外部から魔力が一割以下と認識させる

三、使用者がこの神具を破壊されたり、失った場合でも400時間は持続可能

「なんだ、この出鱈目な効果は？」

「一は当然の効果で、二はこの学園でエヴァンジェリンさんが呪いを解いてない事を錯覚させる為、

三は外で破壊されたり、なくした場合の保険です」

「本当にこんな物を作れるのか？」

「はい、ちなみにマホネットで売ったものは欠陥品同然の代物です」

最近話題になってる魔法具が欠陥品か。

「その神具はどれぐらい持つ？」

「少なくとも、神気を持った俺が壊すか、神や魔王クラスの人外の攻撃以外は壊さないかぎり壊れません」

「ハハ・ハはっは、マホネットでながれてる魔法具が欠陥品だと納得できるな」

ナギ以上の化け物だな。

「それと、かわりに神気や十二神将に神具の事は黙ってくれませんか？」

「構わんど、茶々丸、今の会話を消しておけ」

「はい」

「神具は明日にでも出来ます」

「そうか、それより貴様の力を見たい、神将達に鍛えられた力を見せて欲しいが、いい場所がある」

「それとエヴァでいいぞ、それより魔法学校の卒業式は昨日だろう、なぜこんなに早く此処に来た？」

それが疑問だった、ナギを嫌ってることは何となくわかった、おそらくナギサはマギステル・マギも嫌ってるはずだ。

「人殺しに育てる教育機関に一刻でもはやく離れたかったんですよ」

「人殺し？」

「基本中の基本である魔法の矢でも人は殺せるでしょう？なのに学校はその危険さを教えず、魔法が如何に優れているとかしか話さないんですよ？」

「はははは、確かにな、人殺しか、今の魔法使いは魔法の矢で人を殺せる危険を教えないからな、言িয়েて妙だ」

ナギサウを別荘に連れてった。別荘に入る前に分身を作り先に別荘に行かせ、別荘の中で分身が消えるか試したようだ。結果は別荘の中でも分身は消えなかった為そのまま三人で入った。

「エヴァさん力を見せるだけでいいですか？あまり戦いたくないので？」

「何故だ？」

「ここなら試せるかもしれない力があるんです、それは対人向きじゃなく対国クラスの力ですから」

本当に面白い奴だ。

「わかった、思いっきりやれ」

ナギサは拳に力を入れ、そのまま何もないところに拳を下ろした。そうしたら大気にひびが入った。そしていきなり地震が起きた。

「こ、これは!？」

「マスター、震度7以上の地震です」

「まさか、ナギサの力か!」

ナギサは大気を掴みそのまま斜め右に掴んだものを下に叩きつける様に腕を下ろしたら。

別荘そのものが右に左に傾いた。

「くく・・・はははははははは」

別荘の中はメチャクチャになっていたが気分が良かった。

「これがお前の力かナギサ？」

「はい、でも一番使いたくない力です、これを本気で使うのは初めてです」

「そうだな、そんな力を外界で使ったら国はおろか世界が大変なことになるからな」

ナギサの力は神氣を使い自然界や世界そのものに直接操れる力だった。

今のは大気を碎き直接世界に振動を与えた。

それを聞いたらもう腹が捻れる位に大笑いをした。

ナギサへの興味は完全に失い、私はナギサに興味を抱いた。なんせナギサは世界を破壊できる力を持っていると確信した。

別荘を出るために24時間待つことにした。別荘はメチャクチャだ
が気にしていない、思いつきりやれと言ったのは私だし。

空いた時間にナギサは先程呪いを無効化する神具を作ってくれた。

「はい、ネックレスですけどいいですか？」

「いいぞ、何気にセンスがいいな」

私はナギサにネックレスを貰い首に架けた。

「はは・・・ははは・・・戻ったぞ、あの頃の私に、あの魔力が戻った」

「こんなに嬉しそうなマスター始めてです」

「そうなんですか？」

「はい」

別荘を出た後ナギサに家にすまないかと聞いたが、ジジイがすでに自分の孫に頼んだ後だった。

ナギサの話だと兄が来年に来るらしい、その兄は魔法使いとして期待されている。

ならその兄が来たときにジジイに無理を言わせナギサを家に住ませるように手配を決意した。

タカミチ Side

久々にナギサ君に会ったが、学園長のところまで行く間に会話をしたけど、全く続かない。

僕は途中で諦めて、無言のまま学園長室に案内した。

Side Out

タカミチとナギサが学園長室に入る。

「フオツフオツフオツ、よく来たの、ナギサくん」

「始めまして、近衛近右衛門学園長。ナギサ・スプリングフィールドです。宜しく願いします」

（なんだ、あの頭は人間か！？）

（人間のようだぞ、ナギサ）

ナギサの肩には猫か犬ぐらいの大きさの姿をした騰蛇がいた。

騰蛇は人型と獸方の二種類の姿がある。人型の時は神気が強すぎて普通の人間にも何かあると感じさせてしまうほどの神気を身にまとっている。

獸方は神気を抑えるための姿。普段は獸の姿になってナギサの近くにいる。

（しかし、日本も変わったな。昔はあんな頭をしたのは妖怪ぐらいだぞ？）

（俺は見たこと無いけど、本当に入るんだな）

（今は異妖界にしか存在してないんだよ、人間がいるこの下界には

もう存在しないと言ってもいいぐらいだ)

(そうなんだ)

二人？は念話で学園長の頭の話から妖怪の話をしていた。

「修行のために日本で教師など、また大変な課題を貰ったようじゃのお。」

それでなんでこんなに早く日本に来たかったんじゃない？」

「観光をしようと思いました。お金はマホネットで稼いだ分がありますし。日本語は問題なく使えます。」

だから修行期間が始まるまでに日本をまわろうと思いました」

「そうか観光か、それより最近マホネットで人気が出てきた魔法具はおぬしが作ったのか？」

「はい、学園長がポケットにはいつてる魔法具は俺が作りました」

「気づいておったのか？」

「はい、自分で作ったものですから。それとあまり他の人に言わないで欲しいですが？」

「なぜじゃあ、これだけの魔法具が作れるなら学校の成績ももっと高かったじゃろう？」

「魔法具が作れると知れ渡ったら周りが煩いですから」

「そ、そうじゃのう」

「それで、観光は行ってもいいでしょう、学園長？」

学園長としては学園を出て欲しくないが、止める理由がない。子供だからと言っても先生になるのはいいのかと？聞かれかねん。

「休みだったら僕が案内してあげるけど？」

タカミチが苦し紛れのフォローをする。

「しかし、修行期間までの平日が暇になるんですが？」

「そ、そうだ、だったら君が受け持つクラスの教育実習生みたいに僕のサポートに入らないかい？

修行期間までにいい練習になるし」

「まあ、俺は平日が暇にならなければそれでいいのですが」

二人はほっとしている。

「それより、この学園に闇の福音がいますと噂が流れてますが、本当ですか？」

「本当じゃぞ、しかし今は大人しいから安心してさえぞ」

学園長は全く顔色を変えず答えた。

「彼女の賞金が消えたのは15年前。父も15年前にこの地に来てましたが、なにかあったんですか？」

「お、おぬしどこでそれを？」

「別に、父は有名人ですよ。中には父が入った事がある場所を噂を流してる人もいますよ。」

もっともほとんどがガセですが。けど闇の福音の懸賞金が消えたのは偶然じゃないと思います。

まあ、それより彼女に挨拶したいんですが？」

「なら明日でええじゃろうか？」

「わかりました、明日は日曜日ですし構いません」

「そうか、それと「コンコン」ん？」

「爺ちゃん、うちや」

「おお、ちょうど良かった、入ってええぞい、木乃香」

入ってきたのは学園長の孫である近衛木乃香と神楽坂アスナだった。

「だれなん、その子？」 「誰なの、この子？」

「始めまして、来年の二月からこの学園に教師として赴任して来ナギサ・スプリングフィールドです。」

二月までに高畑先生のサポートをやらせていただきます」

「えーーーーーッ!」「はーーーーー!」

「これでもナギサ君は教育免許を持っておるんじゃぞ。それと悪いが、この子を君達の部屋に泊めてくれんかのお」

(嘘言いやがるぜ、この妖怪ジジイ)

騰蛇^{とうだ}は学園長の目の前で踊っている。無論学園長は全く気づいていない。

「いきなり呼び出されたと思ったら何ですかソレは!」

「そうやで、どういふことなんお爺ちゃん?」

二人は講義する。

(当然だな)

「学園長は着ているでしょう?俺が6年前から一人暮らしをしてると。お金もあります、近くの安い物件を借りればそれでいいでしょう?」

「「えーーーーーッ!」」

「ちょっと、あんた今いくつ?」

「数えて10歳ですけど」

「よ、四歳から一人暮らし？」

「はい、家族は双子の兄一人と両親の代わりに育ててくれたお姉さんがいますけど、僕は山奥に暮らすのが好きだったので一人暮らしをしてたんです」

「じゃあ、家事などは？」

「一通りできます、」

『なんせ、俺達十二神将が育てたからな、そこいらの10歳とは違うぜ』

騰蛇とうだは声を出して言うが当然聞こえない。

「しかしのう、日本では流石に子供を一人で暮らせるわけにもいかんし。頼まれてくれんか？」

「うーん、うちは構わんけど」

「いいわよ、この子しっかりしてるみたいだし」

「学園長「あいてる部屋や物件が無いんじゃ」・・・二人ともよろしくお願いします」

「うん、うちは近衛木乃香、木乃香でええよ、ナギサ君」

「私は神楽坂アスナ、アスナでいいわ」

学園長に布団などの必要な物を買う為にお金をナギサに渡した。

ナギサは断ったが必要経費として無理やり渡された。

三人が学園長室を出た後。

「どう見るかのう、タカミチ君。彼は強いかのう？」

「立ち姿や歩き方をみても何かの武術はやってるみたいですね」

「ふむ、しかし魔力は報告道りか。魔法具をどうやって作っているのかが知りたいんじゃないかのう」

「ナギサ君に他の人には言わないでくれと頼まれましたからね
さすがにどうやって作るのかを聞くのは？」

「たしかにのう、向こうの校長からナギサは学校以外で魔法具を作っていたと最近になってわかったと言っておたからのう」

「報告書だと、将来の夢は喫茶店で常連客と馬鹿話をできるマスタ
ーに成りたいとかいてますけど」

「はじめてじゃぞ、そんな事を書いた魔法学校の生徒は」

「しかし、彼が暴行を受けていた報告がありましたけど？」

「本当みたいじゃ、だから一刻も早く学校を離れたかったんじゃろ」

「そうですか・・・」

なんともいえない空気が学園長室に漂っていた。

1話 闇の福音（後書き）

ナギサの能力の一つは白髭のおっさんの悪魔の力です、某海賊漫画の。

他にもナルトの螺旋丸にくわえそこに炎や水などが加えられるチートです。

次回から十二神将の性格をあとがきに一人ずつ書きます。それと一人か一神、どっちがいいでしょうか？

神具、神器の名前と能力を募集してます。

0話が1話になっていましたが何かのエラーでしょうか？

2話 ナギサの魔法

ナギサ達が学園長室から出て直ぐに木乃香はナギサに質問をした。

「ナギサ君は狐みたいな動物に何かしたん？」

「へ？」

（おい、ナギサこの子は俺が見えてるみたいだ、声は聞こえてないがな。）

（木乃香さんの魔力が関係してるのかな？）

ナギサも騰蛇《とうだ》も木乃香の膨大な魔力に気づいていた。

（そうだろうな、それにアスナって子は魔法無効化能力があるぞ）

（！）

（裏に狙われる理由があるが、どうやらあの妖怪に知らされていないみたいだな。

俺てきには教えた方がいいぞ。こいつらと暮らすとお前と話がしにくい）

（そうだな、狙われる理由がある以上教えたほうがいいな）

「木乃香さんは彼が見えるんですか？」

「彼って誰、誰かいるのここに!？」

「うん、声は聞こえへんけど姿はぼんやりとうあけど見えるで」

「幽霊!？」

「違いますよアスナさん、これから二人に話すことは他言はしないで欲しいです。

二人の命に関わりますから」

「!」

「それとですけど、二人はいずれ知ることになります。今知るか
いずれ知るその時にするか決めるのは貴方達です。安心してください
何かあれば必ず助けますから」

「いずれってどういう意味？」

「木乃香さんは可能性がアスナさんより高いです。アスナさんは自
ら関わらない限り可能性は凄く低いです」

（兄さんは魔法秘匿のルールを甘く見てますからね）

（だろうな、木乃香には気づかないだろうがアスナは最悪初日では
れるぞ）

（はは、流石にそれはない出だろう・・・ないはずだ）

二人に教えなかった場合の話を念話で話してる隙に二人は決意を固めた。

「うちは知りたい！」

「私も知りたいわ、いずれ知るのなら今知った方がいいし」

「分かりました」

ナギサは結界を張った。

「これから話すことは全て現実です。本来なら関わらない限り生涯知らずに済みますが二人は少し特別ですからいずれ知ることになります」

二人の能力は遅かれ早かれ裏に関わるゆえにナギサは魔法の事を話した。

「魔法と言うものは存在します」

ナギサは魔法の矢を放ち三人の周りを一周、二週と走らせる。

魔法の矢はナギサが使える唯一の魔法。

それゆえナギサの魔法の矢は放った後でも自分の意思で自在に操れる。

「魔法・・・」

「とりあえず木乃香さんには膨大な魔力があります」

「ええ!？」

「ほんまなん!？」

「はい、膨大な魔力がありますからいずれそれを悪用する人達に狙われます」

「だからさつきあんなことを・・・」

「アスナさんは今の魔法を無効化できる力があるんです」

「ええ!？」

「その能力は魔法使いにとって天敵ですから知られたら殺されます」

現実離れた話でもナギサの真剣な顔で二人は信じることが出来た。

「普通は目の前で使われなければ気づかない能力ですけど」

「それでアスナは「自ら関わらない限り可能性は低い」て言ったん？」

「はい、試しに撃ってみますから」

「ちょ、大丈夫なの？」

「はい」

ナギサの真剣な顔をみて覚悟を決めたアスナ。ナギサは魔法の矢をアスナに放ったがアスナに当たる前にかき消された。

「・・・消えた？」

「これがアスナさんの能力です」

「でもナギサ君はなぜ知ってたん？」

「これを首に架けてください」

ナギサはリュックからネックレスを二人に渡した。

「ええのん、たかそうやけど？」

「手作りですから材料費は安いですよ」

宝石として扱われない原石に神気を送ることで原石は宝石と変わらない石になる。

ナギサはその石に神気を送る時につけ付けたい能力を想像する事でその石が神具になる。

「器用やな、でもええの本当に貰って？」

「はい、先程木乃香さんが言った獣がハッキリと見え、声も聞こえるようになります」

アスナは騰蛇《とうだ》を見えていなかった為少し不安になったが
木乃香が躊躇わずネックレスを首に架けた為不安が消えた。

「よう」

「うわ、獣が喋った!？」

「うわーかわええな〜」

木乃香はナギサの肩に乗っている騰蛇《とうだ》を撫でた。

「これなんなの？」

「どっちを言ってるんです、そのネックレスか彼か？」

「両方」

「彼は十二神将の一柱騰蛇《とうだ》です。他にも十一柱がいます
けど今は騰蛇《とうだ》だけです」

木乃香は古い部に所属してるためか感動していたが、アスナは何の
ことか分かんず木乃香に聞いた。

十二神将の事を聞いて驚いた。

「魔法を使う人を魔法使いと呼びます。僕は魔法がさっきのしか使
えないため落ちこぼれですが、
変わりに彼等十二神将が見えたり、さっきのネックレスみたいなマ
ジックアイテムが作れるんです」

「魔法使いは他にもいるの？」

「はい、学園長と高畑先生がそうです」

「ええーーーーー！」

「しらなかったな」

「俺は魔法使いになる為の試験が日本で教師に慣れという試験だったのでこの学園に来たんです」

ナギサは試験のことを話した。その試験を知ってるのは少なくとも学園長と高畑先生であるとも教えた。

「木乃香さんは魔法関係は聞かされなかったんですか？」

「うん、今日初めて知ったん」

「やっぱりな、遅かれ速かれ自分の孫が巻き込まれるのに教えないなんて何考えてるんだあの爺さんは？」

「学園長にも考えがあったんじゃないの？」

アスナが学園長の弁護に入ったが。

「それだったらナギサを住まわせること自体が可笑しいんだよ。考

えても見ろ魔法を使えるナギサをお前らの部屋で住ませたら魔法に関わる確率が上がるんだぞ？」

騰蛇《とうだ》がアスナのフォローぶった切る。

「そうやね、それやったら他の部屋でもええし、うちのクラスやったら喜んで引く受けるやろな」

「ぐっ」

「他言無用と言った理由は魔法がばれたりばらしたらオコジョにされますから」

「じゃあ、何で喋ったのよ!？」

「言ったでしょう、木乃香さんはいずれ関わります、アスナさんは一般人より関わる可能性が高いからです。狙われていた場合知らないより知っていたほうが逃げることもできますから」

「そうやな、知らなかったらパニックになるやろうし」

「お二人が魔法の事を知って他言をせず自ら関わらなければ危険が減るわけでも増えるわけでもありませんから。だから出来るだけ自分から関わらないください」

ナギサの真剣なお願いに木乃香はナギサに抱きついた。

「へ!？」

「ナギサ君ありがとな、うちのことに心配してくれて」

「~~~~~!」

「こら木乃香、ナギサが驚いてるわよ」

「ああ、ごめんなあ」

「いいえ、ちょっと苦しかっただけですから」

「まあ、それよりナギサの言ったように私は関わろうとしないから安心して。最も向こうからやってきたら逃げると思うけど」

「うちも」

「ありがとうございます。お二人には護衛をつけますから」

「「護衛?」」

「先程わたしたネックレスは十二神将が見えるようになり話すことも出来るアイテムなんですよ。」

「だから他の神将を護衛につけます」

「大丈夫なの?」

「どうだろうなく、青龍なんて人間嫌いだし」

「木乃香さんには太陰たいいんと六合りくごうをアスナさんには白虎に

「護衛をお願いしますから」

「妥当だな、でも太陰は大丈夫なのかあのお転婆は厄介ごとを持つてくると思うぞ？」

「だれがお転婆ですって」

「「へ!？」」

いきなり神界からきた太陰に二人は驚いた。

その姿は六歳ほどの幼い外見の女の子だった。

「聞いてたのか太陰？」

「ええ」

「だったら木乃香さんの護衛を頼めるか？」

「いいわよ、私に任せなさい」

「大丈夫か、昔は俺を怖がってたチビが？」

「なんですってー!」

「太陰そうやって反応するからもっくんが挑発するんだぞ？」

「もっくんいうな!」

「「もっくん?」」

「この姿の騰蛇《とうだ》はずっと昔はもっくんて呼ばれてたのよ」

「太陰！ナギサに教えたな？」

「ベーーーだ！」

「なんか以外ね」

「そうやな」

「木乃香さんは太陰で大丈夫ですか、なんなら他の神将に頼みますが？」

「大丈夫や、それになんか楽しそうやし」

「これ着けると神将達が見えるのよね」

アスナはネックレスを外した。それで神将が見えなくなる確認を取った。

「これ着けないと本当に見えないのね」

「それはもうお二人のものです。他の人がつけても効果を得られません」

「便利なのかな？」

「落として他の人が拾い身につけて彼等が見えると大変ですから」

「それもそうね」

「そうやった、おじいちゃん達に黙ってええかな？」

「俺はそのつもりでしたけど、どうしてです？」

「おじいちゃんも黙ってたのが原因やな。こんどはうちが黙る番や」

「私もいいけど」

「二人に何かあったら神将達が護衛に回りますから」

「そういえば、学園長達には神将達が見えないのよね？」

「はい、魔法使いだからと言って見えるものではないので。彼等が実体化すれば誰でも見れるんですけど、よほどのことがない限り実体化しません（エヴァンジェリンさんの前で実体化させましたが）」

「ナギサが一人暮らしを始めたのは俺達と普通に話が出来る環境が欲しかったからだ」

騰蛇《とうだ》は太陰との言い争いも終わったのか話に入ってきた。

「へ？」

「兄さんは彼等が見えないんですよ。それに兄さんとの仲はそれほどよくないですし」

「寂しくないの？」

「兄さんとはうまが合わないのでこの6年はまったく喋ってませんし」

「双子なのに可笑しいじゃない？」

「可笑しくないぞ、こいつのアニキは魔法使いとしてはとても優秀で将来期待されてる。」

ナギサは落ちこぼれの烙印を押されてるんだよ。ナギサは極寒の中で、アニキの方は温室育ちだからな」

「なんで、神将達のことを話さなかったの？」

ナギサは父の事を少し話した。周りは自分の意思と関係なく父の後を継がせようとしたことを。

「兄さんはみずから父のようになりたいと願ってるから構いせんが、僕は普通の人生を送りたいんですよ。幸い魔力が最低クラスですから彼等は僕に興味を失いました、そんな中神将達のことを話したら父の後を継がせようとするので落ちこぼれのほうが都合がいいですよ」

「ナギサ君も大変やなあ」

ナギサの事情も分かったところで買い物に向かった。

その夜二人に白虎と六合りくごうを紹介した。

六合は無口で挨拶だけしました。白虎も挨拶を済ました後、アスナ

さんが好みだと言ったのは忘れよう。

翌日

ナギサはエヴァンジェリンを紹介してもらう為に学園長とタカミチと一緒にエヴァの家に向かった。

学園長達はすでに二人が知り合っていた事は無論知らない。

エヴァの家に入り挨拶する。

「こいつがナギの息子だと！それにしても魔力が少ないな？」

「これは生まれつきなので勘弁してください」

「で、なんのようだ小僧？」

「父と何かあったのかを知りたいんです？」

《いきなり本題！？》

二人は冷や汗をかいている。

エヴァは呪いを解くため魔力の高いナギの息子の血が必要だが、その息子の一人は魔力が低すぎたためイラついていると思っている。

エヴァは呪いの事を忌々しく語った。

「貴様の魔法を見てみたい。貴様は何か隠してるようだし」

学園長達も何となくナギサが力を隠していることに気づいていたがどうやって知ろうか考えていた。

「いい場所がある。もし貴様が手を抜いたりしたら殺すぞ！」

殺気を放つエヴァ。そのエヴァに下手な隠し事はしないだろうしエヴァの実力をみせたら殺しはしないだろうと思った学園長達。

しかしこれはナギサとエヴァの三文芝居だと気づいていない。

（演技が上手いなあの二人）

（そうですね、ナギサ様もエヴァさんも演技がとても上手いです）

騰蛇《とうだ》と太裳《たいじょう》は二人のやり取りを見ていた。

エヴァは昨日と違う別荘に案内した。

エヴァは全く構えず見下した態度をとる。

ナギサが魔法の構えを取った。

「魔法の射手・連弾・雷の17矢！！」

17本の雷の矢を放ち自在に操るナギサ。

ナギサは素早くエヴァの懐に入り掌底を食らわす、ひるんだエヴァに雷の矢がエヴァを襲う。

エヴァは寸前で避けたと思ったが雷の矢はナギサが操作してるため直撃した。

「ふっふっふ、魔力が少ない代わりに初級魔法のコントロールずば抜けてると報告にあったが、コントロールどころか自在に魔法の矢を操るか。面白い気に入ったぞ」

学園長とタカミチは驚いていた。

魔法の矢は基本中の基本。

それに追尾効果を付けられるがそれが限界であるのに、ナギサは放った魔法の矢を自在に操った。

報告では最弱の魔法使いと書いてあったが、この戦い方だけでも中堅の魔法使いと渡り合える。

「でも17本が限界です。それ以上だと魔法の矢は操れないんですよ」

「こいつは驚いたのう」

「はい、報告と違いましたからね」

魔法の矢は幾つか緩急すらしていたうえにナギサの体術もかなりレベルが高かった。

学園長達はナギサの実力をしって満足していたが。

「貴様、私の従者になれ」

「「エヴァ!？」」

「何故です？」

「貴様の父、ナギは三年で戻りこの呪いを解くといったが奴はしんだ。その所為で私は15年間もここに縛られてる。貴様がナギが取るはずだった責任を取れ」

「待ってくれエヴァ!彼はナギさんの息子だがナギさんじゃないぞ」

「そうじゃな、いくらなんでも横暴じゃぞ？」

《《《よく言う、ナギの後を継がせようとしてるお前らがいえる台詞か》》》

「わかりました。父が貴方に迷惑をかけたのは確かですから」

「ナギサ君!？」

「タカミチ!遺産相続と同じだぞ、遺産を相続するならそこにある厄介ごとくも相続するんだからな」

「しかし——」

「こいつをいずれナギの後を継がせたいのだろうか？」

「俺は構いませんよ」

「うゝむ、しかしここに通うのは――」ここで暮らせばいいだろう。茶々丸みたいに――」

「しかし彼は木乃香くんやアスナ君の部屋で暮らしてるから直ぐに変えるのは」

「だったら、そいつの兄が来たら私のところに住まわせるぞ。」

私はこいつが気に入ったからな、まさかあそこまで自在に魔法の矢を操れる奴は見たこと無いからな」

（あれえゝなんか話と違うぞエヴァさん？）

エヴァの言ったことは段取りになく少し戸惑っていたナギサ。

ナギサは基本、今の魔法使いの有り方を嫌っているがエヴァみたいな魔法使いは別である。

むしろナギサはエヴァに好感を持っている。

「それとも兄の方を従者にするぞ？」

ナギサよりネギの方が魔法使いとして期待されている。

ネギをエヴァの従者にさせたら他に魔法先生がどうでるか分かったものじゃない。

「なぜ、ナギサ君なんじゃ？」

「温室育ちの坊ちゃんより極寒の育ちのナギサの方が面白いからだ」

二人はエヴァの過去を知っている。

ナギサが自分に似ていると二人は考えた。

「わかった、ネギ君が来たら此処に住まわせよう。但し従者の件は認めるわけにはいかん」

「いいだろう」

その後、1日過ごし二人は別荘を出た。

ちなみにナギサの話を聞きたがっていた二人だがナギサとの会話は直ぐに尽き、

コミュニケーションが取れない親子状態になっていた。

「しかし、魔法の矢をあそこまで操るとはな」

「本当にあれが限界ですよ」

学園長達はナギサの実力をすべて見たと思い込んでいる。

実際は魔法使いとしての全力だから間違っていないが。

「明日からタカミチの授業のサポートをやるんだったな？」

「はい、2－Aはどんなクラスなんですか？」

「騒がしいクラスだな。後はクラスに入れば気づく」

「？」

その後、ナギサも別荘を出て明日に備えた。

2話 ナギサの魔法（後書き）

騰蛇《とうだ》

人型の時は一般人にも何かがいると
感じてしまうぐらい神気が強すぎるため
普段は獣の姿でいる。

十二神将の中でナギサとの中は一番いい。
獣姿の時は悪ふざけがすぎ、よく他の
神将を挑発する（おもに太陰）。

強さは神将最強

人型の騰蛇《とうだ》だけで紅き翼を倒せる。

3話 将来の夢

茶々丸 S i d e

ナギサ先生が来てから二週間が経ちました。

いいのでしょうか？

何がいいのかと言うのは学園をサボって観光していいのかと言うことです。

ナギサ先生がマスターや私の分身を作り
その分身が学園の授業を受けています。

そしてオリジナルである私達は日本の神様達を奉ってる場所を観光
しています。

ナギサ先生や神将様達によると日本に入ったと知らせる為みたいです
ナギサ先生は地酒を売ってる酒屋から地酒を買い
それをお供え物にしています。

私が驚いたのは奉ってると言われる神社は観光用の為で本来は神社の境内だったり奥に奉ってることでした。

山の奥にある小さな社は神々しい雰囲気が印象でした。

ちなみに食事全て喫茶店です。

ナギサ先生は気に入った喫茶店では店長に幾つか質問をしていました。

このコーヒーを入れるコツ

このデザートには何が使われているのだとか

ナギサ先生の報告書の「将来の夢は？」のそこには『喫茶店を建て常連客と馬鹿話をできるマスターに成りたい』と言う夢は本気みたいです。

マスターも喫茶店独自のデザートを楽しみにしてるようです、店によっては同じ商品でも味が違うみたいです。

そして私が気になったのが喫茶店の店長と話す人々です
中には愚痴を聞いてもらったり、
拘りの食べ方を教えたり。

お互いの昔話に花を咲かせたり。

こんな風に楽しそうに日々をすごせるなら将来の夢として目指すナ
ギサ先生の気持ちがありました。

そして一番楽しそうな喫茶店のある出来事が

「『————カフェへようこそ————！』」

「お前等が言うな、誰の店だと思ってるんだ？」

どうやら新規の客さんを出迎えたのが店長さんではなく常連客でし
た。

彼等を見てみると年齢や通ってる学園が違うのに楽しそうにお話し
てるところが私には衝撃でした。

ナギサ先生はあんな風にお客さんと気軽に話が出来るマスターにな
りたいと呟いてました。

私はそんなナギサ先生を応援したくなりました。

ちなみに電車で1、2時間なら日帰りですが、新幹線で行かないと時間が掛かる所は旅館に泊まっています。

マスターも此処最近良く笑うようになりました。
ナギサ先生の御蔭です。

二人の映像を撮るのが私の日課になって来ました。

エヴァ S i d e

ナギサが来て二日目の出来事

タカミチは兄の為にナギサを売ったと思っているが
実際はナギサが魔法関係者に兄を売ったのが正解だった。

ナギサは本来は魔法学校に行く気はなかったが周りの連中が無理やり入学させたそうだと。

ナギサは生活費などは連中が出してる為、何も残さなかった父であるナギを少なからず怨んでいた。

幸いナギサの神気は誰も気づかず、魔力しか感知をされなかった、加え魔力が最低クラスなのが嬉しかったそうだと
その御蔭で周りの連中は兄に目を向けるようになった為、兄より将来の選択増えるからだ。

ジジイとのやり取りではジジイ自身もナギサを売ってしまった事は不本意だったみたいだと
その為罪悪感を感じナギサに何かしてあげれないか模索してるようだと。

今回の事の当の本人であるナギサは私が関わってる為、魔法関係者が僅かだ自分の僅かだが手が出せなくなった事は喜んでる。

そしてナギサが数日たった日に
日本の神にお供え物をしたいから一緒に学園の外に行かないかと誘
われた。

分身があるから学園側にばれませんと言ったのから
私は二つ返事で行くと言った。

15年ぶりの外は気持ちが良かった
神社に行き神を奉ってる社にお供え物をしていくナギサ。

私や茶々丸は普通に観光を楽しめた為
ナギサに感謝をしている。

食事は全て喫茶店だった。

私は最初は嫌がっていたが色々見て回るうちに自分も各喫茶店の味
を比べるのが楽しみになってきた。

ナギサの将来の夢を報告書で見た時はもっと上手いうそを書けと思

った

しかしナギサと喫茶店を巡る内にその気持ちが本物だと分かった。

本人はコーヒー一杯で数時間粘る客に苦情が言えるくらいの店長が目標だといった時は

そんな客はいないだろうと思ったが実際に居た。

「お客様、コーヒーのおかわりはいかがでしょう？」

「見て分からない、まだワンフィンガー分残ってます！」

「そうそう」

「全くガキどもは、それ以上注文しないなら帰れ！」

「俺達はお客様だぞ？」

「そうだ、お客様は神様、神様」

「神？この店の神は店長である俺だ」

「テンチョー、それ独裁者の考えだぜ」

「そうだよ。独裁者、大いに結構！俺はこの店のすべての権限をにぎってるんだから」

「神だろうと、悪の帝王だろうと、ワンマン社長だろうと、裸の王様だろうと、好きなように呼んでくれ」

「悪の帝王」 「ワンマン社長」 「裸の王様」

「裸の王様ーっ、俺、コーヒーおかわりーッ！」

「ワンマン社長ーっ、オレもーっ！」

「呼んでみただけっスーっ！」

「やかましいなあ、突っ込み所には。変なところだけ鋭く育って」

なんだ、このドラマみたいな乗りは？
ナギサはこういう乗りに憧れてるのか？

だが裏に関わらずその日常をかみ締めることが出来る事は間違いないみたいだな。

客と駄弁って過ごす日々も悪くないと感じる。

幾つか気に入ったデザートがあった為、茶々丸が作り方を教えてもらいに言ったり、
私とナギサがどっちの喫茶店の品が美味しいのかよく話すようになった。

ナギサ S i d e

修行の日本で教師を始めるのは二月
それまでに大分時間があるから日本の神を奉ってる所に行きたかったが、
俺が学園の外に出ない為にタカミチのサポートを急遽用意した学園長。

ハッキリ言って無理がありすぎると思う、
二月に教育実習生をやる前に教師のサポートなんてやっていいのか？
まあ、学園長の権力で無理やり実行すと思うが。

それより、二月に担当する2-Aに入って一言。

エヴァが言った異常の意味が分かりました

（なんだ、このクラスは？）

（異常だらけだなナギサ）

騰蛇《とうだ》も同じ感想だった。

（まさか、俺や兄さんのパートナーにさせる為に集めたのか？）

（そうだろうな）

このクラスを見て、学園長の信用は—200なった

そんな言葉を発したいくらいに異常なクラスだったと言いたいです。

二月から教育実習生をやるなどの紹介をした高畑先生。

色々と質問をされたが適当に流した。

高畑先生のサポートなので仕事は多くない。

ちなみに木乃香さんの側には太陰たいいんがいる、

木乃香さんは太陰と仲良くなったのか時々念話で喋る。

（渡した神具の効果の一つ、ある程度お互いに信頼関係が一定上超えたら念話が出る。

まさか一晩で出来るとは思わなかったが)

アスナさんは昨晚に自分の能力は見せない限り危険ないから護衛は入らないと言った。

木乃香さん曰く一筋でありたい乙女心だろうと言った。

初日のサポートが終わり、翌日にエヴァと茶々丸を観光に誘った。

身代わりがあるから大丈夫と言ったら直ぐに返事が来た。

それからは授業は分身が代わりにやっている。

修行期間が来るまでに日本の神様達が奉ってる場所に出来るだけお供え物をしたい。

神々と喋れて、触れ合える力があるのに挨拶（自分が日本に入ったと知らせる為のお供え物をする）をしないと気分が落ち着かない、おそらく神将達のおかげで神様を身近に感じるからなのだろう。

神様達に挨拶（一方的だが）以外にも喫茶店で食事をしたいとエヴァ達に頼んだら了承してくれた。

中ではやっぱりコーヒーとデザートが気になった、

喫茶店の雰囲気や客達とのやり取りには小さい頃から憧れていた。

あの日

スタンの爺さんに町に連れられ一度だけ入った喫茶店、世間話をする店長とお客さんの何気ない日常のひと時、彼等にとってありきたりな日常だろう、だが俺にとっては衝撃だった。

神将達しか信じられず、周りは立派な魔法使いを目指したがる連中、その周りに全く感心を向くことが出来なかった俺が始めて羨ましいと思った。

あんな風な日常を送りたいと思った。

だがナギの息子である以上命は狙われる
生き残る為に神将達に鍛えて貰った。

学校では魔法しか使わず、山奥の洞窟で暮らした
学校の評判は嬉しいことに英雄になれない落ちこぼれ、
その御蔭で父の後を継げるのはネギだけだと満場一致だ、

それから今に至る、喫茶店を建てる夢は諦めるつもりは微塵もない。
絶対に自分の人生は自分で決めてやる。

そう決意しながらエヴァ達と日本中周った。

これと言った神にお供え物が終わったのはお正月だった。

それから、高畑先生のサポートを気づかれず分身と交代した。

それから大分経ち。

修行期間が始まるまで後三日、別段変わった事件は起きなかった為
充実した日々を送った。

しかし修行期間にはあのファザコンの常識知らずの兄さんが来る。

「後三日か…はあ」

「短い幸せでしたね、ナギサ様」

「言わないでくれ太裳《たいじょう》、今まで不気味なくらい何も起きなかったな？」

後三日で兄さん来て、修行期間が始まる。

「どうするんだナギサ、きつとテメエの馬鹿アニキは問題を起こすと思うぞ？」

騰蛇《とうだ》や他の神将達は兄さんを嫌っている、それは別に構わないが。

「兄さんだけの問題なら無視するけど、生徒を巻き込んだら流石にほっとけないしな」

「まあ、頑張れや」

「ナギ様はあのジジイをどう思っていますか？」

太裳《たいじょう》が学園長の事を聞いてきた。

「信用できない」

あの爺さんはエヴァの魔力を結界に利用していたうえ、エヴァに話さなかった。

おまけに木乃香さんに無理やりお見合いをさせ、孫が見たいんじゃない、よかほざいていた、

それって悪く言えばあれだ、とっと子供を作れと言ってるようなも

んだし。

「同感だな」

「それはよかった」

「他の神将達は？」

「同じ意見です」

「当然だろう、あの妖怪を信用する神は存在しないぞ、ブッチャケ
言えば即殺すだろうな、
見た目もグロイからな」

「気持ちわかります、あのジジイは生徒を巻き込ませるつもりみ
たいですし」

太裳《たいじょう》がジジイ等の言葉を使うぐらい神将達は嫌って
いる、
あのクラスは異常だし、兄さんをアスナさん達の部屋に住まわせる
予定のようだ。

俺は明日からエヴァの家に住みことになった、
エヴァが俺に感心を向ければ兄さんに感心を持たないからと言いく
るめたみたいだ。
その御蔭で連中は兄さんに期待して俺に感心を向かなくなるだろう
し。

兄さんには出来るだけ目立ってもらわないとね。

3話 将来の夢（後書き）

太裳《たいじょう》

神将の中で二番目に強力な結界を張ることができる。

穏やかな性格をしていて、誰に対しても丁寧な口調で話すが、本当に稀に気にいらぬ相手には暴言を吐くこともある、普段とギャップが違うから他の神将達が若干引く。

ナギサにとって兄みたいな存在、

ナギサの敬語は太裳《たいじょう》の影響である。

4話 俺の胃は強くないぞ！

ナギサ Side

鳥のさえずりで目を覚ます。

「今日から本格的な教育実習生か…」

俺はベットから起き様としたが、

「またか…エヴァ・・・起きろ」

エヴァの家に住んでから毎晩俺のベットに潜り込んで来る。

「う…ん…………もう朝か…？」

「朝だよ」

「スマン…起こしてくれ」

「はあ…しょうがない」

それにしても、エヴァが甘える事に違和感が全く無いのはやはり見た目の所為なのだろう。

本人の前ではいえないけど。

エヴァを起こし自分の部屋に向かわせ後、茶々丸が作ってる朝食の準備を手伝う。

「マスター、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「もう少しで終わるから待っててくれ」

「わかった」

朝食の準備も終わり食べ始める。

「今日だな、お前の兄が来るのは？」

「そうだな」

「無関心なんだな」

無理もないと騰蛇《とうだ》は思ってるだろうな。

実際、兄と最後に会話をしたのは7年前だ。それより前は兄弟との会話と言うより中が悪い近所の子供同士と言ったほうがしっくり来る。

その所為で、ネカネは困っていたが、俺には関係が無かった。

神将達のおかげであの村には無い常識が持っていた。

その為、村の人達が自分を見る目が理解が出来た。

人とは信じられない種族だと思っていたがスタンの爺さんに連れら

れた喫茶店であの村や魔法使い達が可笑しいと知ることが出来た。

それゆえ、魔法使いを目指そうとしてる兄さんとは馬が合わない。

そのことをエヴァに話していると学園長室に行く時間が来ていた。

「悪い、学園長に呼ばれているから、先に行く」

「わかった」

エヴァ達より早めに学園に向かった。

学園に向かっている学生で

「流石に初日で問題をおこさないだろう」

ちなみに学園から兄さんを迎えに行ってくれと頼まれたが断った、
なぜなら、7年前から全く喋って無いからだ。

「7年ぶりの会話を楽しみにしてるぜ」

「悪趣味ですね騰蛇《とうだ》」

「お前だって気になるだろう、こいつらは双子の癖に全く喋らなかつただろう、

イギリスにいた頃は俺達としか喋ってないしょ」

「そうですけど」

「全ての会話を足しても六合より会話が少ないぞ」

「六合を引き合いに出すな！」

「なんですってーこのガキーーーーっ！」

「わってるよ、言ったただけだ。ん！なんか騒いでるな？」

「あれは、アスナさん!？」

「それにお前のアニキもいる様だ」

「まさか、学園長に挨拶する前から問題を起こしたのか？」

俺は頭を抱えたかった、まさか初日から問題を起こすなんて予想が出来なかった。

「はははは、予想斜め上に行ってるぜ」

「騰蛇《とうだ》、笑いすぎですよ。ナギサ様行きましょう」

S
i
d
e

O
u
t

アスナが寝過ごした所為で木乃香も急いで学園に向かう。

「アスナが悪い」

「太陰、あなた神様なんだから起こしてよ」

アスナが一般人には見えない神将に文句を言うアスナ。

「私は目覚まし時計か？まったくアスナが二度寝したのが悪いじゃない」

「ぐぐっ・・・」

「アスナも太陰も喧嘩はあかんよ」

「だって、アスナが私の所為にしてるのよ」

「まあまあ」

「それより、相変わるず速いわねアスナは、木乃香はローラスケートで私は飛んでいるのに」

「悪かったわね体力馬鹿で」

そんな時、見ず知らずの子供が走っているアスナの隣に並び、笑顔で口を開いた。

「あのーあなた、失恋の相が出てますよ」

「えゝ・・・・・・・・？」

この時、アスナの中がキレた。

「なんですってーこのガキーーーーっ！」

（あれ、アイツは？）

（知り合いなん？）

木乃香と太陰が念話で会話をし始める。

（あれ、ナギサの兄よ）

（兄！？それにしても全然似てへんね）

（しょうがないわよ、ナギサは祖母に似だし）

そんな風に二人で念話をしていたら、学園の方からタカミチがやってきた。

「ネギくん！」

「高畑先生!？」

「タカミチ！」

「し、知り合い・・・!？」

（アスナ、このガキはナギサの兄よ）

「はぁーーーーーっ!？」

（アスナ、声、声）

（そうだった）

「あ、あの高畑先生の知り合いなんですか？」

「ああ、昔ちよつとね、それに彼はナギサ君のお兄さんだよ」

（馬鹿アスナ、声に出さないの！）

（だって、あのナギサの兄っていうなら、もっと落ちついてるかと思
って！）

アスナもここ最近太陰と中がよく念話が出来るまでお互いを信頼す
るようになった。

「麻帆良学園へようこそ。いい所でしょう？ ネギ先生」

「え、先生？」

「・・・」

（アスナ、ナギサと同じ試練なのよこのガキ）

「ナギサなら兎も角こんなガキが先生なんて？」

「彼は頭はいいんだ」

（頭だけね）

（そうなん？）

（そうなのよ、一般常識がないのよ、さっきアスナに失恋の相が出てるなんて失礼なことを言ったでしょ？）

（そうやね、でもこの歳ならこれが普通やないの？）

（まあ、そうでしょうけど、教師をやるなら常識を身につけないと）

木乃香と太陰が念話をしてる内にとんでもない事が起きた・

「ん・ハ・・・はくちんッ!!」

ネギがくしゃみをした途端にアスナは下着姿になった。

「キヤーーーーー!? なんなのよコレーーーーー!?」

（なんで、服だけが脱げるん？）

（あのガキ、魔力を暴走させたのよ!）

木乃香やタカミチが驚いてる最中にナギサがやって来て自分の上着をアスナにかぶせた。

「な、ナギサ……?」

「スイマセン、これを使ってください。高畑先生、ジャージを持ってきてくれませんか?」

タカミチもフリーズしていたのかナギサの一言で我に返り、ジャージを取りに行った。

「あ、ありがとう」

アスナにお礼を言われた後、ナギはネギに拳骨を与えた。

「痛いよ!?!」

「なんで、こんなことしたのに謝らないんだ?」

「うう」

（これじゃあ、どっちが兄か分からないわね）

（そうやね、アスナも気の毒に）

（大丈夫なんですかね、アスナさん？）

（災難だったな）

（全くよ、女の敵ね）

神将達がお互い念話で話を始める。

（しかし、学園に入る前に問題を起こすとは、本当に主席なの？）

（まあ、所詮このガキは温室育ちのガキですから） 注＊太裳《た
いじょう》

（（・・・））

（どうしました？）

（（いや、何でも））

その後、タカミチが持ってきたジャージに着替えたアスナとナギサ達は学園長室に向かった。

そして開口一番が

「このガキが教師なんて、どういうことですか？」

「大丈夫じゃよ、教員免許は持っとるし」

（ほんまに？）

（持ってるわけ無いじゃない、権力で何とかしたんでしょ）

（なんか、じいちゃんが信用できんくなってきたえ）

（しかも、ガキは当然の様な顔をしてるし）

「しかし修行のために日本で学校の教師を……。そりや大変な課題じゃのう」

（修行って）

（隠す気があるのかしら？）

「二人にはキツイ課題じょうが、駄目だった場合故郷に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟があるのじゃな？」

「は、はい頑張ります」

「ナギサ君もええじょうか？」

「構いません」

「そうそうもう一つ、このかとアスナちゃん。しばらくはネギ君をお前達の部屋に泊めてもらえんかの。まだ住むとこ決まっとらんのだよ」

「ゲッ（ナギサの方がまだマシよ）」

「えっ」

（やっぱりね）

（じいちゃん・・・）

「・・・うちはええよ」

「アンタなんかと一緒に暮らすなんて絶対にお断りよ」

アスナはそう言って学園長室を出た。

「まったく、何を考えるのよ」

「そうね、あのガキなん怒られたのかわかってないし」

「でもあの歳はあれぐらいやろ？」

「だからガキは嫌いなものよ」

「落ち着きなさいアスナ」

「太陰！アイツの弱点しってる？」

「知らないわよ」

「まったく、弟のナギサがしっかりしてるのに、兄はアレなの？」

「荒れてるわね」

「ははは・・・」

「騰蛇《とうだ》さんが言った温室育ちの意味がやっと分かったわ」
木乃香と太陰はアスナを怒りを静めながら教室に向かった。

エヴァ Side

なぜか、神楽坂アスナが不機嫌で教室に入ってきた。

しかしナギサが二人に裏事情を話したといった時は驚いたが、理由を聞けば当然の判断だと理解できた。

ジジイの孫には太陰と六合を護衛を付けてるオマケつき。

それから、ナギサ達が教室に入ってきたが、兄の方がクラスの罨にかかって馬鹿丸出しになっている。

あれがナギの長男なのかと疑いたくなった。

ナギサは頭を抱えたい表情をしている。

（なるほど、魔力は高いがそれだけだな、肉体は貧弱、それに罨を避ける為に魔法を使ったな、あれが主席かと大声で叫びたい）

（小僧が英語でナギサが数学か、英語はでなくていいな）

私はそのまま、気分が悪くなったと言って教室を出た。

S i d e O u t

初授業が上手くいかなかった事で落ち込んでいたネギにタカミチが励ました後、

ネギはネギは出席簿を開きを開き元凶であるアスナの写真を見て、ペンでイジワルと書き満了した顔で廊下を歩く。

「あれは27番の宮崎のどかさん……たくさん本持って危ないなあ」

「あっ」

「やっぱし！」

思足を踏み外したらしく大きく本が散らばり姿勢を崩した彼女は階段の外側に落ちた。

「きゃあああああああ！」

ネギは咄嗟に杖を握り、魔法を唱えのどかの体を浮かせ、彼女の元に走り、
腕を伸ばして彼女を抱きとめた。

ネギはのどかが気絶しているだけだと知ったら安堵したが、自分の杖を拾った人がいた事でフリーズした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あんたやっぱり超能力者だったのね！」「ちがつ」誤魔化したって駄目よ。目撃したわよ。現行犯よ！」

「あ、あの・・・・・・・・」

「白状しなさい！」

「ボ、ボクは魔法使いで・・・」

「そんなのどうでもいいわよ（自分でばらしたーーーーー!?）」

「ゴ、ゴメンさない！ 他の人には内緒にしてください。バレるとボク、大変なことに〜」

「んなの知らないわよ！」

アスナはナギサから魔法がばれるとオコジョにされてしまうと聞いていたが、正直どうでもいいと思った、ナギサのように自分達の事を考えてくれて教えてくれたならまだしも、こっちが態々超能力という逃げ道を作ってやってあげたのに自らばらした事に半場自棄になっていた。

「ううっ、仕方がないですね。」「何よ」秘密を知れたからには記憶を消させていただきます！」

「はあ!？」

「ムニヤムニヤ、ちよつと頭がパーになるかもですが、許してくださいね」

ネギが呪文みたいなのを唱え始めた、咄嗟にとめようとしたアスナだが。

「ギャ——!! ちよつと待って!! パ——って!？」

「消えろ——!!」

ナギサ Side

「はあ、やっと終わったか」

（ご苦労だったな、先生）

ナギサは職員室に戻ろうとすると目の前で兄が呪文を唱えアスナを全裸にしていた。

（……………これはどう言う事だ？）

（うっわ、ついてないな） 注＊太裳《たいじょう》

（……………ピキ）

（なんで、俺が通りかかった時にこんな事が起きるんだ）

ナギサはアスナの元に行き上着を貸した。

「ネーギーせーんーせーいー」

「ナ、ナギサこれはその・・・」

「なにかあったの・・・・・・・・・・」

最悪のタイミングで高畑先生がやってきた。

「イヤーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

アスナはとんでもないスピードでこの場から逃げた。

「え、えとこれは？」

（あ、頭と胃が・・・・）

その後、三人で学園長室に向かい学園長に起きた事を説明をさせた。

「——記憶を消すのに失敗しまして、ああなりました」

「・・・」

高畑先生は苦笑してるのか何も言えずにいた。

「まあ、今「教師としてやっていく以上、一般の教師や魔法使いと同じ扱いにするべきです、子供だからとかいうなら初めから教師にさせないでいただきたい」

「う・・」

「それに、アスナさんは被害を受けてます」

「それは」

「ぼ、僕は「黙ってろ!!」——ひっ」

パリン

ナギサが大声を上げたことで幾つかのガラス製品で出来たものが割れた。

さらに学園長と高畑先生は耳を塞いで悶絶していた。

（（鼓膜が・・・））

「何を遊んでいるんです、学園長、高畑先生？」

（（自覚なし!?!））

自覚しているがしていない振りをしたただだ、ボケ共

「そうじゃの、とりあえず嚴重注意と給料の減給、そして注意しても直らないのなら嚴重な処罰を与える。それでどうじゃ」

「もう一つ、あります」

「なんじゃ？」

「くしゃみをして相手の衣類など吹き飛ばす癖というか魔力の暴走を止める為の訓練が必要だと思いますが？」

「それは・・・」

「まさか、女子の下着姿や全裸がられるから嫌だということですか？」

「・・・そ、そんな事無いぞ」

「だったら、仕事が終わった後に訓練をさせてやってください」

「そ、そうじゃな」

「それと、一つ聞きたいのですが？」

「なんじゃ？」

「この試練をやめる時は退職届を出せばいいんですか？」

「な、なにを！？」

「ナギサ君!？」

「俺の胃はそれほど丈夫じゃないので、胃を守る為なら、この試練を辞退させていただきます」

「しかし・・・」

「このまま、胃を痛めるなら橋の下で暮らした方がマシです。幸い俺は森の奥で生活をしていたので山にでも逃げさせてもらいます」

「わ、わかった、ネギ先生にはしっかりと言い聞かせるので安心してくれ」

（（安心できないから言ったんだ））

「それと、アスナさんの制服の弁償も忘れないでください」

エヴァ Side

十二神将の玄武が水鏡で全てを見せてくれた。

「全く、聞いて呆れるどころか、殺意すらわくぞ。なんだあの坊ちゃんは？」

10歳位の外見をした神将、玄武が口を開いた。

「我也同意見だ」

「さて、これでジジイがナギサに面倒ごとを押し付ける事はなくなつたか。

ナギサが学園を出れば上の連中が何を言うかぐらいわかっているだろう」

「私もあまりナギサ先生に負担を駆けて欲しくありません、マスタ
ー」

「わかっている、ジジイは私がナギサを気に入ってる事を知っているし、あまり厄介ごとは押し付けんはずだ」

「もし、それでナギサに何かを押し付けたら？」

玄武がエヴァに質問をした。

「無論、この学園を消す。神具の御蔭で全盛期の力が戻ったんだ、これ以上ジジイの言いなりになるつもりは無い。ナギサの夢を叶えられないなら容赦はせん」

「マスターやはり惚れましたか？」

「貴様はシリ阿斯に決めてやってのになんでこの空気をぶちこすー
ー！？」

屋上でエヴァの声が響いた

4話 俺の胃は強くないぞ！（後書き）

太陰《たいいん》

六歳ほどの幼い外見と共に気性も子供。気も意志も強いが、繊細で打たれ弱い一面を持つ。風の扱いはかなり過激で荒っぽく大雑把で力技が得意である、だが細かいことは苦手で弱風すら起こせない始末。

以前弱風を起こそうと思ったが木々が風で切断されて以来、「私の風は強いのがうりなの！」と開き直っている。

最近木乃香やアスナと話す。二人を親友と思ってる。
ちなみに三人でよく授業中念話をで話す。

5話 ナギサの師（前書き）

最近色々ありまして最新が遅れました。

こっちは今夏で暑いです。

試験の母国語だけでもきつかったのにドイツ語は悪夢でした。

今月は従兄弟達の誕生日が多い上クリスマスやお正月など大変です。
こっちの人間は祭り好きでウザイです。

夕方からパーティを始めたのに朝方に終わるなんてバカかといいた
いです。

5話 ナギサの師

ナギサは仕事を終わらせ、エヴァの家に帰る途中に神将の白虎から学園に侵入者が現れたと知らされた。

「数は？」

「6人だな、ただ鬼を次々と召喚している」

「そうか、学園長達が何とかするか」

ナギサはそう思っていたが

「お前さんのクラスの子が今戦っているぞ？」

「はぁ、あの爺さんは生徒に何をさせてるんだ？」

ナギサはため息を吐きながら愚痴をこぼした。

「白虎達はエヴァに帰りが少し遅くなると伝えてくれ」

「「わかった」」

「わかりました」

白虎は竜巻にのりエヴァの家に向かった。

「さてと、場所は・・・」

ナギサは神気を使い自分の意思を風と同調させ、自分の生徒が戦っている場所を突き止めた。

「この気配は桜咲さんに龍宮さんか・・・後は魔法関係者の先生^{バカ}達か、彼等を助ける義理は無いから桜咲さん達だけでいいか」

ナギサは地面を蹴り戦闘のある場所まで走った。

刹那と真名は次々と召喚される鬼達に苦戦していた。

ここ最近学園の結界が弱また事を気づいたのか今までに無いくらいに攻めてきた。

「高畑先生が援軍に来るまでにもう少しの辛抱だ刹那」

「分かっている、しかしこの数を相手ではこっちの体力が持たない」

鬼の数は50は超えていた。

「そろそろ終わりやな、お譲ちゃん達」

「それは、君達のほうだと思うけど」

声を発したのは刹那達ではなくこの場に似つかわしくない9歳の子供先生だった。

「ナ、ナギサ先生！」

「大丈夫ですか二人とも？」

「は、はい」

「こっちは体力と弾が尽き賭けてるだけだ」

「そうですか、後は俺が殺っておきますから、休んでください」

「しかし！」

「それにしても、鬼達^{あなた}は運がないですね？」

「こ、これは自分から「ああ、違いますよ桜咲さん、俺は彼等に言っただけです」

ナギサはそう言いながら鬼達に指を指す。

「ほく、ワシらが運がないと言うかボウズ？」

「ええ、今日侵入すんじゃない、昨日なら楽に死ねたんですからね」

ピクピク

「昨日やったら楽に死ねたやと？」

「ええ、今日は色々ありましてストレスが一気に溜まったんですよだからあなたは楽に殺しませんよ」

「来い、氷白刀！」

ナギサが言った瞬間に右手から白い氷の刀が出てきた。

「さあ、ぶった斬りの時間だ、出来るだけ俺のストレスを発散させてくれ！」

ナギサは敬語を使うのを忘れ、鬼達に向かっていった。

タカミチ Side

自分が担当していた敵を殲滅し桜咲君達の援護に向かったが、そこにいたのはナギサ君だった。

白い刀を握り締め鬼達に向かっていった。

「アレは彼のアーティファクトなか？」

僕は直ぐに援護に向かおうとしたが、ナギサ君が

「さあ、ぶった斬りの時間だ、出来るだけ俺のストレスを発散させてくれ！」

と言った為か様子を見ることにした。実際はナギサ君がとんでもなく不機嫌だったから近づけなかったただけだが。

それより、ナギサ君が握っているのは白い日本刀だ。

「彼は日本の剣術を知っているのかな？」

ナギサ君はイギリスで生まれ、そして育ったため刀の扱いは大丈夫なのか心配になったがそれは杞憂だった。

ナギサ君は鬼達の攻撃を避け、確実に反撃をしている。

攻撃を避けたと時に鬼の足を斬る。

鬼達の攻撃を巧みに受け流し反撃する。

「————ハッ！」

ナギサ君は容赦なく一匹、二匹、三匹と次々と鬼達を斬って行く。

それだけじゃなく、鬼達は斬られたままその場に倒れていく、本来なら消えるはずなのに鬼達はその場に血まみれで倒れる。

「さあ、来い！ どんどん来い！ いくらでも貴様等をぶった斬ってやる！ とつとまとめてかかって来い！

アハハハハ！」

桜咲君達は目の前の光景をみて顔を青くする。

ナギサ君の顔は鬱憤を晴らすかのように清しい顔をしていた。

テンションが高く、何時ものナギサ君じゃないよ。

全ての鬼を斬った時には回りは血だらけだった。

「全く運がないですねあなた達は、兄さんが問題を起こさなければ楽に死ねたのに♪」

（ネギ君、弟に迷惑をあまりかけない様にしないと・・・）

「あ・・・が・・・あ」

どうやら全ての鬼達は生きていたようだ。ハッキリ言えば殺されていたほうが楽だっただろうにと思ってしまった。

「それよりあなた達は生命活動を維持する為に召喚者の魔力を強制的に奪っていますね、これだと召喚者は魔力だけではなく生命力まで奪われ死にますよ？」

そう言って直ぐに術者が死んだのか鬼達も消えていく。

現場には鬼達の血が残っているけど。

ナギサ君は桜咲君達に挨拶を済まエヴァの家に戻った。

僕に気づいていたのか僕が居る場所に顔を向けた。

「後始末を頼みましたよ」という表情をして帰った。

その後、桜咲君達を帰らせ現場の掃除を学園長に頼み、学園長にナギサ君の事を知らせた。

術者は力尽きそのまま死んでいた事も知らせた。

「太刀筋は刀子君より上とはもう、以前エヴァと戦った時の体捌きも驚いたもんじゃが」

「はい、魔法の矢しか使えないゆえ、落ちこぼれや最弱の魔法使いと言われたのが信じられないですよ」

「殆んどの魔法使いは魔力で実力を測るからもう、ナギサ君もナギ君の息子として生まれていなければ落ちこぼれなど言われなかったじゃろうに」

「そうですね」

ナギサ君は魔法の矢を極限までに極めている、剣で斬り合いをしていても体術で殴り合いになっても魔法の矢を何時でも撃てるはずだし自在に操るなら人間の最も脆い部分に狙えばいい。

並みの魔法使いでは彼には勝てないだろうと再確認した。

「しかし、ネギ君が起こした問題でストレスが溜まっていたとはの

う」

「普段は冷静でも子供ですから無理もないですよ。けどあそこまで口調が変わるとわ思いませんでしたけど」

ナギサ君が僕の授業のサポートをしていた時は冷静で精神が成熟した子だと感心した。

今日はネギ君が起こした事は先生としては不味かったし。

「ネギ君も反省しておるし、同じ失敗はせんじやろう」

「そうですね、ネギ君も頭のいい子ですから」

だが、次の日は犯罪と言ってもいいような事件を起こすとは思わなかった。

「それより学園長、結界のほうは？」

最近結界が弱くなっている。

「ふむ、どうやらエヴァの魔力が急激に減ったようじゃ、恐らくナ

ギサ君の血で呪いを無理やり解除しようとして失敗したんじゃない。
エヴァの魔力はナギサ君より少なくなっておるし」

「そうですか」

「結界は新しい術式を加えるしかないみたいじゃのう」

エヴァ Side

ナギサが帰ってきて、ナギサは直ぐに風呂に入った。

その間にジジイ達のやり取りを玄武の鏡で見ていた。

「これで私の魔力が戻った事をばれる心配はなくなったな」

私の魔力を更に少なく認知させる為にナギサに新しい神具を創ってもらった。

結界から魔力を奪われなくなったが、代わりに結界は弱まった。

私が呪いの解除に失敗して呪いが強くなり魔力が激減したと思わせることが出来た。

本来ならジジイが私の魔力が激減した事に質問をしたら答えるつもりだったがジジイは自ら結果を予想したようだ。

御蔭で説明する手間が省けたが。

「マスターの魔力は私の計測器ですら激減したと結果が出ていますから、学園長があのような結論を出すのは無理ないと思います」

「だろうな、ナギサの神具には驚かされる。それにしても剣術があのそこまでの腕だとはな」

「当然だろう、俺達神将達が直々に鍛えたんだからな」

「そうだったな騰蛇^{とつだ}」

「と言っても俺達が教えたのは戦い方で戦う心構えは他の奴だがな」

「そうなのか？」

「ああ、ナギサは否定するが今回の戦闘もそいつの影響が出てるぜ。相手に容赦しないところはな」

ナギサの戦闘は玄武の鏡で見えていたが。

ナギサは昨日奴等が侵入しても殺す事は変わりはない見たいな事を言っていたし。

「どんな奴だ？」

「元人間だ」

「なんだと!？」

「吸血鬼じゃないぜ、仙人だ。見た目は12歳くらいの子供だ。性格は最悪、実力は俺でも本気でやらないとヤバイ、ナギサの神気に気づいた唯一の人物だからな」

ナギサの神気に気づいた仙人か。

「性格が最悪と言うのは？」

「皮肉極まりない物言いを言うし、厄介ごとを作り関係ない人間たちに投げ、それを見て楽しむ性格だ。」

本人曰く面白半分じゃなく思いっきり楽しんでると言う性格だ」

「そんな人物の噂は聞いたことないぞ？」

「自分の足がつかないようにする術は透明人間級だ、なんせ二百年は生きてるからな、お前の三分の一とは言えナギサと同じくらいの神具を作るからな」

「ナギサと同じだと？」

「本人は神具ではなく宝具パオペイと読んでるがな。俺達が使う神器は神将の石柱の天空が作ったものだ。ナギサはその天空に師事をしてもらったからあの出来はわかるが、そいつは我流で鍛えたから性質が悪いぜ」

「ナギサは何か師事を受けたのか？」

「この学園に来る一ヶ月前にナギサに自分の昔話をしたりな。最後に一度戦ったが、まあナギサはボロ負けだが」

「ナギサがボロ負けだと!？」

「ああ、仙術はナギサが神気を使い自然界と介入する術と基本的には同じだからな。

二百年生きてる経験値にはナギサでは勝てんぞ」

「なるほど」

「ナギサが敬語で挑発するのはそいつの影響だ。本人は否定するけどな」

「なんの話をしてるんだ？」

「どうでしたかナギサ先生？」

「いい湯加減だったよ茶々丸」

「そうですか」

「お前の師匠の話だ」

「うえ、老師の話か・・・」

ナギサの顔は見る見るうちに嫌な表情になった。

「そんなに嫌なのか？」

「まあ、一番苦手な人物だからな」

「老師と呼んでいるが何を教えてもらったんだ？」

「老師の過去の話とか、その時はいい人だと思っていたが徐々に性格を露にしたんだ、

最初の印象の所為で敬語をやめられなくなったし。最後の選別はトラウマだったからその……」

「そ、そうか」

ナギサの顔が青くなっっていたからこの話を終わりにして晩御飯にした。

ナギサ S i d e

兄さんが来て二日目。

アスナさんが自分の布団に入って来たとか言って、文句を言っていた。

アスナさんの気持ちは良くわかる。

「なんせ、エヴァもお前の布団に入ってるからな」

「そうだな」

俺は騰蛇の答えを適当に流した。

エヴァには敬語を使う必要がないくらいに信用している。
見た目があれなので強く言えないが。

「お前はエヴァや茶々丸にはタメ口だしな、俺達神将以外では初めてだろう」

「そうだな、他の魔法使い達と違って信用も出来るし、好感が持てるよ」

「それだけか？」

「ん？」

騰蛇^{とうだ}が意味不明な質問をした。

「いや、忘れてくれ（まあ、前世の記憶がない以上見た目と同じ歳だからしかないか）」

職員室に向かい、授業の準備をした。

「おはようございます、ナギサ先生」

「おはようございます、新田先生」

俺は新田先生に挨拶をする。

俺の中で新田先生は頼りになる先輩だ。色々アドバイスしてくれるし、よくお世話になっている先生だ。

数学の授業が始まるまで新田先生と色々話をした。

数学の授業が始める時、アスナさんがとんでもなく不機嫌だった。

太陰の話によると、問題を解かせる為、なんアスナさんを指名した後くしゃみをしてアスナさんの服を吹き飛ばしたそうだ。

授業が終わった後、桜咲さんに屋上で話があると言われ屋上に向かった。

俺が屋上に着いた時には桜咲さんはすでに屋上にいた。

「遅れててすみません」

「いえ、呼んだのはこちらでしたから」

「それで、呼んだ理由は昨日の事ですか？それとも授業の事ですか？」

「昨日の事です」

（戦闘中は神気は使わなかったし、使ったのは神器の氷白刀だけだ。氷白刀にかんじて聞いてきたらアーティファクトと言い訳ができるし）

俺は色々と桜咲さんがしてきそうな質問の答えを考えていたら、思いがけない事を桜咲さんが口にした。

「私に剣を教えてください！」

「は！？」

予想外の言葉だった。

「昨日のナギサ先生の太刀筋をみて、ナギサ先生の下で「却下」――

「へ？」

「気持ちには嬉しいですが、俺は斬撃の基礎の素振りを繰り返しただけで剣術と呼べるものではないんです」

「は？」

「基礎の唐竹、袈裟斬り、逆袈裟、左薙、右薙、左切上、右切上、逆風そして刺突きを繰り返し、素振りをしただけです」

「そ、そんな・・・」

魔法の矢も自在に操れるよう訓練にした。神気を出来るだけ使わずに戦えるようにできる事は全てやった。

「基礎を疎かにすれば足元をすくわれる、だが基礎だけでは倒せないなら基礎の斬撃を
必殺までに昇華させればいい。俺はそう考え実行しただけです」

神将達にはこの場面でどの斬撃がいいか、実戦と同じように訓練してもらったが。

基礎と模擬戦の繰り返しをやって来ただけだ。

「俺が桜咲さんにしてあげる事といえば模擬戦ぐらいです」

「それでも構いません」

「だったら期末試験で全科目60点以上取ってください。そうすれば春休みに時間が空けば桜咲さんの模擬戦の相手をして構いません」

「ろ、60点ですか？」

桜咲さんの成績は結構通っているが頑張れば無理ではない。

「はい、桜咲さんは本来は学生です、学生の本分は勉強ですから」

「わ、わかりました」

「わからない事があれば聞いてください」

「はい！」

桜咲さんはそのまま下に下りた後、とうだ騰蛇が口を開いた。

「しかし、お前もイジワルだな」

「今は教師だよ」

「はいはい、全くやると決めたら徹底的なのは相変わるるか」

「ほっとけ、それより桜咲さんはどう思う？」

「ないが、剣かそれとも」

「それ以外に何かあるのか？」

「いや、なんでもないよ。剣は鍛えれば結構いい線までいく」

「そうか」

その時白虎が現れ

「ナギサ、お前さんのアニキが問題を起こしたぞ」

「……どんな…問題？」

「惚れ薬を飲んだ。しかも強力なやつを」

「と言うことは？」

「ハーレム状態だな。カカカあのガキは本当に頭でっかちだな」

「場所は？」

白虎に案内してもらい兄さんがいる場所に向かった。

図書室に居たが、

中には宮崎さんが兄さんを押し倒そうとしていたがアスナさんが無理やり図書室のドアを蹴破り、その衝撃なのか宮崎さんは気絶した。

「あ、アスナさん……な、ナギサ！」

「やあ、ネギ先生。覚悟は出来てる？」

兄さんは真っ青になったが、何のことか分からない顔をしていた。

「学園長室に向かうか」

「ナギサ。ちょっと怖いわよ・・・」

「大丈夫ですよ♪」

俺は兄さんを学園長室まで連れて行き事情聴取した。

「――それで惚れ薬を飲まされました」

話を聞いている学園長と高畑先生は冷や汗を垂らしている。

「だそうです、惚れ薬、しかも大人用、相手の意思すら無視し捻じ曲げる行為です」

「学園長、ネギセ「高畑先生、子供だと言うなら先生、おやめてもらった方がいいです」

俺の言葉に高畑先生は黙った。

「ぼ、僕はアスナさんに飲まされて・・・」

「アスナさんに飲んでもらおうとしたんだろう？ネギ先生が犯罪を犯した事は変わりません」

「は、犯罪！？僕はただ惚れ薬を作っただけで」

「犯罪だと言う自覚もしてませんが？」

「そうじゃのう、ネギくん君は魔法秘匿はどうしたんじゃ？」

「あ・・・」

「昨日注意したはずじゃぞ？それにナギサ君の言うとおりあれだけの強力な惚れ薬の製造は犯罪じゃ」

「そ、そんなの聞いたことないですよ。マホネットだって惚れ薬も売ってるじゃないですか？」

「あれは子供用じゃ。元々好意を持っている相手の好意を少しだけ上げる程度じゃ。」

それにこれは魔法学校で習ったはずじゃぞ？」

「そ、それは・・・」

「君にじは魔法の常識をもう一度覚えてもらわんといかんのう」

「そ、それって」

「とりあえず、二週間君の魔力を封印する、それと仕事の合間に魔法学校で覚えた事をもう一度覚えてもらう。それでよいな？」

「は、はい」

送還じゃない事をして安堵したらしい。

「もう言ってよいぞネギ君」

「はい、失礼しました」

兄さんは学園長室を出て行った。

「それで、俺には？」

「おぬしにはネギ君のサ「お断りします！」・・む」

「今回の罰はネギ先生の責任です。なぜ彼の尻拭いをしないといけないんですか？」

「おぬしら兄弟じゃろう？」

「それだけで尻拭いをしろと？」

「ナギサ君はネギ君の兄弟だろう？」

今まで黙っていた高畑先生が口を開いた。

「此処は職場ですよ？それに「それ以上言わなくていいぞ」

学園長室のドアが開きエヴァが入ってきた。

「「エヴァ!？」」

「ジジイ、今回も昨日の事も小僧の自業自得だ。それなのにナギサに尻拭いをさせるのか？」

「しかし、二人は「ふぎけるなよジジイ、お互いが迷惑をかけ助け合うなら構わんが、ナギサは何も迷惑をかけていないぞ」

「しかし、エヴァ。ネギ君は子供だ」

「ナギサも子供だぞ、いい加減子供だからと言いつては止せ。ナギサの言ったとおり子供なら最初から教師をやらせるな！」

「く・・・」

「わかった。それより他にナギサ君に頼みたいことがあるんじゃないか」

「警備の事ならやりませんよ。修行には書いてませんでしたから」

俺が言ったと同時にエヴァは二人に殺気を飛ばした。

二人にはエヴァの魔力が更に激減したと認識しているがエヴァは殺気だけで二人の動きを封じている。

「わ、わかった。これ以上は余計な事は頼まんから殺気を抑えてくれ」

「ふん！」

殺気を抑えたと同時に二人は呼吸をした。

「行くぞナギサ」

「しかし」

「かまわんよ」

学園長はそう言ったので俺は学園長室を出た。

「ありがとうエヴァ」

「かまわん、それにしもジジイどもは……」

エヴァはぶつぶつと言いだめた。

その後はエヴァは教室に戻り、俺は職員室に戻った。

5話 ナギサの師（後書き）

ナギサ・スプリングフィールド

10歳

髪の色は茶髪

目の色はネギと同じ

神気を使い自然界に同調できる能力があるが戦闘では使おうとしない。

神気で神具や神器を創り色々な能力を加えられるが一度作った神具や神器に能力の追加はできない。自分で作った物には名前をつけない主義だが気に入った物だけつける。

徹底的に剣術と体術と魔法は基礎を繰り返した。

その為、剣術と体術の太刀筋などは必殺と言ってもいいような威力。魔法の矢は魔力が少ない所為で全部で74発しか撃てないが、魔法の矢を撃った後でも自在に操れる。操れる最大の数は17。

神器の一つである氷白刀は唯一ナギサが名前をつけた神器。

氷の刃で出来た刀。伸縮自在で切れ味は名刀以上。

能力は水分を自在に操れる能力。（ぶっちゃけ氷輪丸と同じです、ただ龍だじゃなく獣の形をした氷を相手に襲わせる事もできる）

6話 ブチキレタ（前書き）

あけましておめでとうございます。

6話 ブチキレタ

エヴァ Side

最近の夕飯はナギサも茶々丸の手伝いをしている。

ナギサは料理の腕は一般的だったが、茶々丸に腕を上げたいから教えてくれと頼んだ。

茶々丸も丁寧に教えてる所為かナギサの料理の腕は茶々丸と同じくらいになっている。

茶々丸曰く『ナギサ先生は筋がいいです』、だそうだ。

そんなナギサは茶々丸に恩返しをしたいと言ってきた。

「俺の料理の腕が上がったのは茶々丸の御蔭だし、なにか恩返しをしたいんだ」

「私も楽しんでましたから、お気遣いはいらないです」

「モラエルモンハモラットケよ、ケケケ」

茶々丸が楽しんでいたと言うのは聞き捨てならないが。

「何をあげるつもりだ？」

「茶々丸も魔法が使えるようにしてあげたいなと」

「なるほど、茶々丸も魔法を……って貴様は何を言ってるんだ？」

あまりにもアツサリと言うものだから聞き逃すところだったぞ。

「オモシロソウジャネエカ」

「私にもつかえるのですか？」

「うん、理論上は可能はずだし」

「ホントウカヨ？」

「予め魔法具や魔道書のかわりに術式を内包した階差導機サーバーを創って、そこにアクセスして魔法を使うシステムだ」

「そのさーばーとはどうやって創るんだ？」

「人間の脳ではできない演算能力をもつコンピュータや携帯などにシステムとして創り、そこに数秘学と魔法陣を利用して組み上げた転路呪語コードを組み込んでいく。

茶々丸の中に階差導機サーバーを創り、転路呪語コードを組み込めば」

コンピュータ関連だとわからんが。

「茶々丸は魔法が使えるようになるのか？」

「ああ、エヴァがいいと言うなら」

「茶々丸が魔法を使えるようになるのは面白そうだから構わんぞ。ただ、茶々丸の事となると超に聞くのがいいな、そのさーばーとかは私にはさっぱりだからな」

「超さん？知っているのか？」

「知っているぞ。それにしても全く新しい方法で魔法を使えるようにするとはナギやあの小僧と大違いだ」

翌日

小僧が唐突に。

「実はうちのクラスが最下位脱出できないと（僕が）大変なことになるので、皆さん頑張っていきましょう！」

ナギサの呆れた表情になった。

（いきなりどうしたんだ？）

私は念話でナギサに質問をした。

（学園長が最終課題として期末テストで、
2－Aの最下位脱出だそうです）

（それで、小僧が張り切ってるのか）

（最初は簡単だと樂觀してたけど
このクラスの現状を知って張り切りだしたんだよ）

（それにしても、

何と言う自分本位の頼み方だ)

(言わないでくれ
頭が痛いんだ)

(ご愁傷様)

(・・・はあ)

小僧の言葉で、クラスは啞然となったが
直ぐに騒ぎ始めた。

更に、英単語野球拳を提案したバカが現れ、小僧は承諾したがナギ
サが止めた。

ナギサは小僧に野球拳の事を教えた。

すると、小僧の顔は真っ青になっていった。

(ナギサも苦労してるな)

ナギサは英単語野球拳を提案した桜子に注意して、授業を進めた。

クラスでは最下位脱出しないと、留年や小学生からやり直すなどく
だらしない噂が流れた。

(あの小僧も少しは言葉を選んだほうがいいな)

そんな風にくだらない学園の授業が終わる。

日が沈み、超の研究所に向かった。あらかじめいくと言ったので、時間が遅くともすんなり入れた。

昨晚、ナギサが茶々丸に魔法を使えるように新しい魔法の基礎理論を超に説明し始めた。

超 Side

ナギサ先生が茶々丸が魔法を使える方法があると言った時は驚いたネ。

ナギサ先生が考えた新しい魔法の基礎理論は誰も考え付かな事だった。

「この理論なら茶々丸も魔法が使えるネ」

まさかコンピュータや携帯を触媒にして魔法を使おうなんて誰も考えない事だ。

物質世界の法則を司る上位階層にアクセスし、そこに組み込んだ転路呪語コンマを実行する事で魔法と同じ現象を起こす。

（この歳で此処まで考えられるのは異常ネ。

報告では最弱など落ちこぼれとか言われていたと書いてあったが)

ナギサ先生が考案した魔法はあらかじめ転路呪語コードーを組み込んでおけば魔法名だけを言えば発動できる。

だけど、この魔法を使う人間が増えたらリスクが大きくなる。

それは、相手によって階差導機サーバーに侵入され、自分の転路呪語コードーを奪われる可能性がある。

けど、茶々丸だけが使えるなら強い武器になるネ。

階差導機サーバーを構築して、転路呪語コードーを組み込むには少し時間が掛かる。

「ナギサ先生は、何でこの魔法を独占しないアル」

この魔法は便利だ、既存の魔法より早く発動できるのはアドバンテージになるネ、

結局、魔法使い同士の戦いは先に強力な魔法を相手に放つのがセオリー。

この魔法を独占すればナギサ先生は魔法使いと肩を並べることができる。

もつとも、魔法使い達は邪道と言いきりそうだけど。

「タダの恩返しだけど？ 茶々丸にはお世話になっているところか、料理を教えてください先生だから。」

その恩返しです」

「それだけか？」

私はナギサ先生の答えに呆気に取られて、つい聞き返した。

「うん、それだけ」

突然、ナギサ先生の携帯がなり、ナギサ先生は電話を取った。

「はい、もしもし」

『ナギサ先生、大変だよ！ネギ先生とバカレンジャーが図書館島で行方不明に・・・！』

「俺も直ぐ行きますから、そこで待っていてください」

ナギサ先生は電話を切って、溜息を漏らした。

「ハア」

「どうしたんだ？」

「バカ兄さんが、バカレンジャーと図書館島で行方不明になったら
しい

俺は今から言ってくる」

「それは、ご愁傷様ネ」

こんな時間に、仕事なんて同情するヨ。

（兄の上にバカをつけた。次はバカアニキと呼びそうだな）

（そして、最後にはバカ先生と呼ぶでしょうね）

「私の脳内に合わせるな、茶々丸！」

「いえ、マスターが顔に出してましたから」

茶々丸も人間らしく冗談を言うようになったネ。

「はあ、それにしても、図書館島は立ち入り禁止じゃなかったけ
？」

「そうだな、それで入ったなら不法侵入したことになるな」

「クラスで読めば頭がよくなる本が図書館島にあると噂が流れてたヨ。」

学園長が意図的にながしたネ」

「……そうか、エヴァ達は先に戻ってくれ」

あれ？ 雰囲気が変わったよ……。

ナギサ先生はそのまま図書館に向かった。

「ずいぶんキテるな。あれは」

「ええ、キテますね。マスター」

ナギサ先生はネギ坊主の尻拭いをしてきたからか、ストレスが溜まってるようだ。

それより、私が居た時代ではナギサ先生は存在しなかった。

最初は警戒してたけど、あの様子なら学園の味方をすると思えない。

「聞きたいけど、ナギサ先生は強いかな？」

その質問に、茶々丸達は答えなかった。

「安心するネ。学園側には漏らさないヨ」

そう言ったら

「強いぞ、世界を破壊する力を持っているが、ナギサは使わないだろうな」

「そんなに？」

あの、闇の福音が賞賛している。

「格闘や、剣術は基本技術を徹底的にやっているから、攻めも守りも強いぞ。あの体だと狙いにくいだろうからな」

「ナギサ先生は才能はないと仰っていましたが、基本技術を必殺と呼ばれるまでに訓練したのですから、十分に才能が有ると思います」

「ナギサは自分を過小評価しすぎだからな」

「二人が此処まで賞賛すとは思わなかったネ」

ナギサ先生の魔力は一般の魔法使いの1、2割しかない。それなのに、二人は賞賛してる。

「ジジイ達は、ナギサの力の一部しか見てないから、この事は言うなよ？」

「わかってるヨ」

私は茶々丸が録画した動画を間違えて再生してしまった。それを見

た私は

「な、なな」

映像にはナギサ先生とエヴァンジェリンが一緒に寝ている映像だった。

「どうした……」

エヴァンジェリンも何事かと、モニターを見たら

「茶々丸ーーーーー!! 貴様は何を撮っているかーーーーー!?!」

「何を怒っているんですか、マスター?

マスターが子供らしいしぐさを見せるのは、

ナギサ先生の布団の中に潜り込んで寝ただけですから。
それを、記念に録画しただけです」

映像の二人がお互いにパジャマ姿なら微笑ましいが、
エヴァンジェリンは黒のキャミソールをきている。

「消せーーーー! 直ぐに消せーーーー!!」

エヴァンジェリン、少し音量を下げて欲しいヨ。

「よろしいのですか、マスター？」

「よろしいに決まってるだろう！！」

「マスターとナギサ先生の仲睦まじい映像を本当に消してもよろしいのですか？」

「うう……………」

エヴァンジェリンが引いたヨ。しかも戸惑ってるネ。

「ナギサと……………」

何か、ぶつぶつと呟いてる、正直いって怖いネ。

この後は、エヴァンジェリンが言い負かされ、映像は茶々丸の仲で永久保存されることになった。

よく調べると、レベルの高いブロックをしている動画があったが怖くて調べる気にならなかったヨ。

Side Out

木乃香はアスナや他のバカレンジャーに魔法の本を探すのに、図書館島を案内を頼まれた。

（木乃香もお人好しね、こんなどこに來なくても、部屋で勉強会で
すればいいのに）

（まあ、ええ気分転換になると思えば）

（だからって、こんな時間に来なくても）

太陰は木乃香に呆れて、一緒に図書館島に向かった。

（それにしても、徹夜で勉強をしたくないから、魔法の本を探すな
んて）

木乃香は太陰の言葉に何も言えず苦笑した。

一行は図書館島の深部へと進み始めた。

人外魔境と言ってもいいような、波乱万丈な冒険だった。

一行がたどり着いた先には台に安置された本があった。

（本当に此処は図書館なの？遊び心満載の罠があったけど）

（ウチも、自信がなくなってきた）

「す、す、すごすぎるー！ー！！」

「ラスボスの間アル！！」

すると、ネギが突然叫び出した。

「！？あ、あれは伝説のメルキセデクの書ですよ！！本物の最高の魔法書ですよ！！」

木乃香を他所に、バカレンジャーは目的の物が見つかって大喜びをしている。

バカレンジャーが本に近づくと、祭壇へと続く石橋が中央からぱっくりと二つに分かれて下に落ちた。

幸い、落差が殆んどなかった為、誰も怪我をしていない。

落ちた場所には文字が刻まれた石版の上だった。

「ツイスターゲーム？」

佐々木が一言呟くと、いきなり石像の眼が光り、そして喋り出した。

「フオフオフオ、この本が欲しくば…ワシの質問に答えるのじゃー！ー！！」

（木乃香……この声は？）

（言わんというて太陰………）

（ごめんなさい）

（石像の声は明らかにあの妖怪ね、木乃香は顔を真っ青になって苦笑してるし）

太陰は木乃香に同情した。

アスナ達は混乱しているが、ゴーレムは無視をして問題を出した。

「では第一問。D I F F I C U L Tの日本語訳は」

「えー！ー！？」

「なにそれー！ー！？」

ネギは混乱したアスナ達を落ち着かせ指示を出した。

「大丈夫です！ちゃんと問題に答えればワナは解けるはず！落ち着いて「D I F F I C U L T」の訳をツイスターゲームの要領で踏んでください！」

「答えを教えたら失格じゃぞ」

「そんな――！！」

（木乃香）

（ん）

（あの爺さん、魔法を秘匿する気がないみたいね）

（そうやね、あんな動きをする石像が普通にあるわけないし）

アスナとまき絵は四苦八苦しばがら、何とか最終問題までたどり着いた。

その体勢は、女の子としては恥ずかしい体勢になっているが。

（もしかして、あの体勢になった女子を見たいからやってるんじゃないでしょうね？）

（それやったら、うちは恥ずかしい）

「みなさん、何を遊んでるんですか？」

「「え!?!」」

アスナとまき絵は声に気づいてないのか、二人以外は声のした方に振り向いた。

そこには、怖い笑顔を浮かべたナギサが立っていた。

ナギサ Side

ハルナさんとのどかさんを帰らせ、バカ兄さんが行った図書館島に向かった。

神氣を使い、意識を風と同調して、図書館を探った。

（有り得ない数の本だな。それに、幾つか罨もある。この神氣は太陰か）

太陰の気配を感じ直ぐさま、風とのリンクを解除した。

「ナギサ! この場所で意識を風と同調するのは危険だぞ!!」

「わかってるよ、ちゃんと無駄な情報は抑えた」

意識を風と同調するのにはリスクがある、それは風を通じた情報が

強制的に俺の脳に流れ込んでくる。
普通なら脳が耐えられず、脳が壊れるが、俺は力《意思》ずくで抑えて、人の気配だけを索敵した。

「太陰達はまだ目的地にたどり着いてないみたいだ。急げば追いつけるかもしれない」

俺は、魔力で脚を強化して、太陰達の元に向かった。

太陰達と合流するまでに幾つかの罠を避け、最短ルートを使った。

太陰達を見つけた時は、妖怪と同じ声をしたゴーレムが笑って、アスナさんとまき絵さんにツイスターゲームをやらせていた。

「あのセクハラジジイは……」

「どうする？」

俺は携帯のカメラで一部始終を撮った。あの声は学園長なのは誰が聞いてもわかるはずだ。

強力な証拠になるし。

それにしても、あの妖怪は楽しんでるな、間違いなく犯罪だぞ。

俺は、一分ほど撮ったあと、彼等に近づいた。

「みなさん、何を遊んでるんですか？」

「「「え!?!」」」

アスナさんとまき絵さん以外は俺の方に顔を向けて、驚いた。

「こんな時間に遊ぶなんて、寮の門限はとーとーっくにすぎてますよ?」

「な、ナギサ先生」

「なぜ、ここに居るのが分かったでござるか?」

「目が笑ってないアル」

（怒ってるわね）

（あわわ、どないしよう）

「ナギサ、実はテストの為に魔法の本を探しに此処まで来たんだ」

「とりあえず、あの二人の遊びをやめさせないとね」

「は、はい」

俺はポケットから、鈴を取り出した。

鈴の中には俺の神気で創った糸がある。

その糸は俺の意思で自在に操れる上、魔法でも千切れない糸だ。殺傷能力は皆無だが相手を拘束するには最高のものだ。

鈴は普通のもだが。

鈴から糸を取り出し、見た目だけで糸を操る達人のような動きで、ゴーレムの手足を封じた。

「フオ!？」

「おおー!ー!」

「すごいアルー!ー!」

「二人とも、もういいですよ」

ゴーレムの動きが止まった事に気づいたアスナさんとまき絵さんは体勢を戻し、

俺達に近づいてきた。

「ナギサも来てたの？」

「ナギサ先生」

「それより、石像の動きが止まったアル。今のうちに本を」

「そうですね」

バカ兄は何を言ってるんだ。

「二人とも、帰りますよ」

「けど、ナギサ！」

「此処は、立ち入り禁止のうえに、あの本は持ち出しが禁じられています。」

この場所に着ただけでも不法侵入罪ですよ。その上、あの本を持ち帰ったら窃盗罪です。

ネギ先生はどうして止めないどころか、この犯罪に加担したんですか？」

「そ、それは「犯罪になるなんて知らなかったと言わないですよね？」」

俺の言葉でなのも言えなくなったバカネギ。

「私達って犯罪者になった？」

アスナさんが聞いてきた。

「今更、気づいたんですか？」

「もしかして、警察アルか？」

「大丈夫ですよ、窃盗のほうは未遂に終わったし、このまま帰るなら、不法侵入の方は目を瞑っておきます。重くても春休みに何日か補習で済むはずです。

でも、ネギ先生は学園の先生達に聞かないといけません」

「ぼ、僕はどうなるの？」

「それは、学園が決める事です。それより皆さんは先に戻ってください。

俺はこの糸を解いてから帰りますから」

笑顔を向けて、彼女達に言った。

「」「」「はい」「」「」

俺は無言のまま太陰達が離れるのをまつた。

「学園長、明日話がありますから。学園長室で待っていてください」

「な、何のこと？」

とぼける妖怪をを無視して、糸を解いて、この場を後にした。

「せ、せめて何か言っておくれー！ー！」

図書館から出た時は深夜になっていた。

アスナさん達は気不味い顔をしていた。

「今日はこれで、お開きです。勝手に入った事も門限を破った事も黙っておきますので、試験に集中してください」

「ありがとう、ナギサ先生」

アスナさん達は自分達が犯罪を行った事を気にしていたが、黙っていると言った事で少しは元気になった。

翌日

学園長室には、妖怪とメガネが待っていた。無論、気まずい顔をして。

「さて、学園長。自分が何をやったのかお分かりですか？」

「な、何の事かのう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は、昨日撮った動画を見せた。

「この声を照合すれば、どうなるか分かりますね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なぜ、読めば頭がよくなる魔法の本があると、噂を流したんですか？ 魔法を秘匿する気があるんですか？」

俺は真剣な顔で問い詰めた。

「あの子達がいた場所の、更に下で強制合宿の様なものをやらせる為に、その噂を流したんじゃない」

「そうですか……でも、アスナさんとまき絵さんがツイスターゲームをやってる時は、嬉しそうな声を出してましたね？」

「っぐ」

学園長は言葉につまり、高畑先生は顔が引きつった。

「生徒に頭がよくなる魔法の本があると噂を流し、その生徒達に犯罪に誘導した事に何も思わないんですか？これは立派な犯罪になるんじゃないですか」

「そ、それは」

「これは俺達の最終課題です。俺達が彼女達にテスト勉強をさせるべきじゃないですか？」

「た、確かにのう」

「ネギ先生は立派な魔法使い（マギステル・マギ）になる為に生徒達を道具のように利用しようとしたんですよ」

「それは、言いすぎだよナギサ君」

「いえ、ネギ先生は最初に頭が良くなる禁断の魔法を使おうとしましたよ」

「・・・・・・・・」

その言葉で無言になった学園長に腹が立った為、俺は一瞬にして学園長の机の上にのり、ジジイの顔を机に叩き付けた。

「いい加減に現実をみてくださいよ。魔法を秘匿するように言ったにもかかわらず、魔法を使おうとしたうえ、一般人の前で魔法と言う言葉を何度も言っていた」

高畑は俺の変貌振りに驚いて動けなかった。

「生徒に犯罪をするように誘導したのは事実だろう。これ以上一般人を駒のように扱うなら殺すぞ！」

「「!」」

俺の言葉に二人とも驚いた。

「八刀刑って知ってます？ 第一刀が胸口、みぞおち

第二刀が二頭肌（上腕筋）、第三刀が大腿、四刀五刀で肘より先を切断し、

六刀七刀で膝下を切断、最後に八刀目で首を落とすという処刑法です。

この処刑法の面白いところは中々死ねないと言うことで」

俺は殺気を込めて言い放つ。

「俺にも、どうしてもよくなることだってあるんですよ」

俺は学園長の首を離し、元の位置に戻った。

ジジイとメガネは真っ青になっていた。

「ネギ先生が生徒達を制止しなかった事は他の先生達に教えてください。」

ネギ先生には一般常識がないの事が今回でハッキリとしたはずですよ。俺はこれで失礼します」

S i d e o u t

ナギサが学園長室を去り、数分がたってから学園長達は呼吸が出来た。

「学園長、これ以上遊ばないでください。ナギサ君の殺気だけで心臓が止まるかと思いましたよ」

「わしは、おでこが痛いんじゃないが」

学園長はおでこを擦って言った。

「それは、自業自得です」

「わしも、反省しとるよ。しかし、本当に9歳かのう。

あの殺気は子供が放つものじゃないぞ」

「あの殺気は、エヴァ以上のものでしたよ」

「かと言って、ナギサ君を監視するわけには行かないじゃろうし」

あれだけの殺気を放つナギサを危険と言って、監視すわけに行かない。

ナギサが住んでいるのはエヴァの家。そこにはロボットの茶々丸がいるから、人間の気配には直ぐに気づくだろうし。

「そんな事をしたと、エヴァが知ったら大変な事になりますよ」

「分かっておる。様子を見るしかないじゃろうな」

ナギサは授業が終わった後に、分からない事があれば残って教えると言ったので、

アスナ達は自主的に残り、分からない所を一から教えてもらった。

その御蔭か、2－Aは一位をとった。

最も二位とは僅か0，1点差だったが。

その後に、図書館に侵入した生徒やネギの罰が決まった。

バカレンジャー達には春休みに宿題を出さただけですんだ。

だが、ネギは春休みの一週間後に試験を行う事になった。

その試験はどれだけネギが一般常識を身につけたかのを計る試験だ。その試験の結果次第では故郷に帰す事になる。

これに関しては、学園の先生たちが話し合って決めた事だ。

流石の学園長や魔法先生達とはめられなかったようだ。

これで、三学期は終わった。

6話 ブチキレタ（後書き）

茶々丸がパワーアップ回です。

茶々丸の出番がちょこつとだけ増えます。

茶々丸が使う魔法は、11eyes crossoverの現代魔術です。

発動キー、同じものを使わせてもらいます。

7話 つかの間の休息（前書き）

何故、息抜き作品が1400ポイントも評価されているのか不思議です。

まだ7話なのに。

正直言って、7話ぐらいなら300いけばいいなと思ってました。なんせ、まず難しい表現が出来ず、陳腐でやつすい表現しかできないこの自分の作品に。

母国語の勉強で日本語のレベルが下がっていると思っています。それなのに、此処まで評価してくれた方々には感謝しています。

それにしてもこっちは熱いです。冷房ないと寝れません。

6年前は必要はなかったのに、地球大丈夫ですかね。

7話 つかの間の休息

ナギサ Side

春休み終盤

春休み中の仕事も終わらせ、直ぐに暇になった。

兄と違い、一般常識を測るテストはしなくていいが、どんなテストなのか少し気になった。

「まあ、普通に育てられていたらわかる問題だと他の先生たちが言っていたし・・・」

兄がまともな教育を受けてるとは思えんが。

「だろうな、あのバカは叱られた事がないみたいだし」

「そうだったけ？」

「ガキの頃、お前らを叱る大人が少なかっただろ？」

「そういえば、スタン爺さんだけだったからね。

でも、俺はお前らによく叱られていたから、違和感がなかったけど」

「当たり前だろう。ガキの頃のお前もやんちゃだったんだぞ」

「今もガキだけどな」

「見た目だけな。精神は成長したし」

「父親の様な言動ですね、とうだ騰蛇」

俺ととうだ騰蛇が話していると太裳が話に割り込んできた。

「父親と言うより、兄さんかな」

「こうちん勾陣は母親ですか？ はっ！！」

太裳は何かに感づき神界に帰ったと思ったらこうちん勾陣が現れた。

「ナギサ、太裳は？」

「帰ったよ」

「そうか、じゃあな」

こうちん勾陣はそのまま神界に戻った。

「あいつ、まだあのネタを引っ張ってるのかよ」

「まいたいだな。それより桜咲さんの腕はどう思う？」

桜咲さんが全科目60点を超えたため、春休みに1時間程度だが模擬戦をやっている。

「腕は結構あるし、才能もあるが、技を出すのに時間が掛かるな。それ以外は実戦あるのみだ」

「それにしても、エヴァが怖かった」

桜咲さんと模擬戦をしたときのエヴァの顔と視線がこわかった。

「エヴァに言ってなかったのか？」

「模擬戦だし、別荘も使わないから言う必要がないかなと思ったんだけど」

実際に模擬戦をやったのは、エヴァの家から少し離れた広い場所だ。

「お前も直にわかるようになるから」

「何が？」

「何でもねえよ。ん！ アレはお前のクラスの子じゃなのか？」

「ナギサ先生！」

「おはようございます。大河内さん」

「おはようございます」

確か、水泳部だったよな。温泉プールがあるからこの季節でも練習できるけど、

この時間で会うのはおかしくないか？

「ナギサ先生はお買い物ですか？」

「いえ、仕事が終わったので、昼食をとろうかと」

時間は10…50。時間としては速い。そんな顔をしている大河内さん。

「この時間なら、空いてますし。のんびりと食事できますから」

「そうなんですか」

理由がわかったのか、疑問の表情が消えた。

実際に、ピーク時にのんびりと食事を取る気になれないから、俺は速めに食事をとる。

行きつけの場所なら、店員と駄弁れるし。

「大河内さんもうどうです？奢りますよ」

「ふえ！？ いいんですか？」

「ええ、構いませんよ（問題を起こしてくれないだけで、大分助かってるし）」

「ええと、それじゃあ、お言葉に甘えて」

（はあく、エヴァが知ったらどうなるか）

大河内さんは少し戸惑いながらも受けてくれたみたいだ。

二人で行きつけの店に向かつてる途中に、もう一人の生徒に出会った。

「なっ・何故、大河内さんとナギサ先生が!？」

アキラ Side

ナギサ先生がお昼をご馳走してくれると言う事で、ナギサ先生について行ったら、

委員長にあった。

「な・何故、大河内さんとナギサ先生が!？」

ヤバイ、委員長が誤解してる。

私が先程のやり取りを説明使用と思ったら、ナギサ先生が先に説明した。

「いえ、俺は仕事が終わって、行きつけの店でお昼にしようと、店に向かう途中で大河内さんに会ったので、一緒にどうかと誘っただけですよ。

雪広さんもうですか？」

「行きます!!」

即答。

そのまま、三人でナギサ先生の行きつけの店に向かった。

こうして見ると、ナギサ先生は随分と落ち着いていて、ネギ先生と双子の弟だと思えない。

実際に、ネギ先生よりクラスをまとめてる。

そんな事を考えていたら、お店に到着した。

喫茶店？

「此処がナギサ先生の行きつけのお店なのですね!!」

委員長がなにか興奮してる。

見た目はいい感じの喫茶店。でも、こんなところに喫茶店があるなんて聞いたことないし。

三人で中に入った。

「いらっしゃいませ。ってナギサ君じゃん!!」

「おはようございます。乙女さん」

「後ろの子達も一緒の席でいいの？」

「はい」

「じゃあ、空いてる席へどうぞ」

私達はそのまま、空いている席に座った。

「ナギサ先生、彼女との関係は？」

委員長が怖い顔で質問をする。

「さっき、言ったように此处は行きつけの店ですから」

「そ、そうですか……」

先程の、乙女さんがお冷を持ってきた。

「乙女さん、今日のおススメは？」

「今日は、海鮮パスタだけど、どうする？」

「うーん、今日は・・・インドカレーで。ご飯じゃなくナンで」

「お二人は？」

「私は海鮮パスタで」

「私も」

委員長と同じものを注文をした。

「かしこまりました」

「店長、インドカレー、ナン一つと海鮮パスター二つ」

「あいよ」

乙女さんが店長にオーダーを言った時、お客さんが見せに入ってきた。

「あー！！ シンさんに秋夫さん。いっらしやい」

「おはよう、ってナギサじゃん。久しぶり！！」

「おひさー！！」

「お久しぶりです」

常連繋がりなのかな、ナギサ先生と知り合いみたいだけど。

二人は私達の隣の席に座った。

簡単な自己紹介をして、二人は注文したが。

「俺は学ブラね」

「駄目!!」

奥から、店長らしき人の声が聞こえた。

「何だよ!?!」

奥から、若い男の人が、トレイに乗せた料理を持ってきた。

「はい、お待たせ」

「来た来た」

私達が頼んだパスタも同時に持ってきてくれた。

「まあ、おいしそうですわ」

「そうですね」

見た目だけでも、美味しいと思える。

「なんで、学ブラが駄目なんだよ?」

そうだ、それが気になった。

「学生用メニューは学生証を持ってる人にしか出せないから」

「カタイなあ。確かに学生証を持ってないけど、今、必死に駅前で英会話を学んでるんだぞ！」

授業をサボりまくってる秋夫より、よっぽど苦学生だぜ」

見た目は、17ぐらいなのに、学生じゃないかな？

「以前に、言っただろ？ この店のルールは俺だって」

「テンチョーのドケチー！ しみったれクソおやじー！！」

店長も店長ならお客さんもお客さんかな。

「ケチ？ 無一文の全裸^{バカ}を助けたの誰だっけ？ へるぷみいぷりいず」

「クッソー、わーったよ！ 秋夫！ お前が学ブラ頼め。それで俺のと交換しよう。テンチョー、それならOKだろ？」

「まあね」

店長さんは上機嫌になって厨房に戻った。

へるぷみいぷりいずは凄く気になるが、聞かないほうがいいだろう。

「たっく、あのテンチョーはロクな死に方をしないぞ」

「まあまあ、テンチョーの性格は今に始まったわけじゃないだろう」

「わってるよ。お前は何を頼むんだ？」

「オムライスセットを」

「わかりました」

乙女さんは厨房に行き、二人のオーダーを伝えた。

「お二人は常連のですか？」

委員長がお二人に質問する。

「そうだよ。この喫茶店の料理は本格的だからね。店長は最悪だけど」

「聞こえてるぞ」

奥から店長の声が届いた。

「げえ！！ 自分に関しては地獄耳だな、相変わらず」

みんなの仲はよさそうな感じだ。あんな風に言い合えるのは凄と思う。

「なんか、店長に憧れるな」

「「「は！？」」「」」

ナギサ先生がとんでもない事を口にした為、私達は驚いた。

「あんな大人に憧れちゃ駄目よ。お母さんは許しません!!」

「誰がお母さんですか。　シンさんは男でしょう？　それに保護者でもないし」

「そうですわ。むしろ私こそがナギサ先生の保護者として立候補しますわ!!」

「それも違う!!」

シンさんがボケて、ナギサ先生がツツコミ。さらに委員長がボケ。ナギサ先生がまた突っ込んだ。

「お前等はアホか？」

「黙ってるサボり魔!!」

「ハモッタ！　何も同時に言わなくてもいいだろう？」

「だったら、バイトぐらいしたほうがいいですよ？」

「そうだな、大学に通わないなら、働け。俺より一つ年上なのに情けないぞ」

ナギサ先生とシンさんが容赦なく言葉を投げる。

「しょうがないだろう。俺はその何と言うか……っお、美由紀じゃん!!」

「ごまかしたな」

「ごまかしましたね」

ごまかした。私もそう思う。

「うーいす、あれナギサに凸凹コンビも一緒か！」

「誰が凸凹コンビだ？ ノータリン！！」

「おはようございます」

「だれが、ノータリンですか！？」

「こっちは無視ですか……」

「「お前だよ、宇宙人みたいな思考をやがって」

ナギサ先生を無視して、お店で言い争う三人。

「どこが宇宙人なのよ。こんなレディを捕まえて」

美由紀さんと呼ばれた子はシンさん達の席に座った。

三人は私たちを無視して、話をしている。その後、なにか小声で話し、店長を呼んだ。

「三馬鹿が何のようだ？」

美由紀さんは真剣な表情で

「私が店長の初恋の人に似てると聞かされました」

「は!？」

店長は「何言ってるんだコイツ? 頭大丈夫か?」という顔をしている

「私のその面影を重ねてみるのは仕方がないと思いますが。

店長の気が済むまで、私は「ハッキリと言おう。俺の初恋の人はお前とは全く似ていない、まるで別の生き物だ!！」

「宇宙人みたいな女だったんですか!？」

「貴様だ!! どっから聞いたそんなデマ？」

「やっぱり、宇宙人じゃねえか！」

「くく、ははははは、無理。笑いをこらえられない」

「ぷ・・・笑ってはいけませんわ」

お二人は爆笑しながら、机をバンバン叩き、委員長は笑いを堪えようと必死だ。

美由紀さんお二人に指差し。

「この、凸凹コンビに聞きました」

「お前らか！ 全くお前らもいい加減にしとけ。つか、机を叩くな」

「嘘だったんですか！？ 私傷つきました」

「悪い、悪い。今日は好きなだけ奢ってやるから」

シンさんの一言で、美由紀さんの表情が変わった。

「本当ですね？」

「ああ、男に二言はない。なあ秋夫？」

「まあ、それぐらいなら」

美由紀さんは嬉しそうになったが、直ぐにとんでもない事を口にした。

「じゃあ、まずはこの店のメニュー全部をひとつずつ！」

「「「は！？」」」」

ナギサ先生、店長さん、それに乙女さんが哀れむ目でシンさん達を見ている。

「「「ご愁傷様」」」

「マ・・・マジ？」

「この子、メツチャ食べるぞ」

シンさんと秋夫さんの顔が見る見る真っ青なっていく。

「美由紀ちゃんはバイト代が出たら、食べ物に一気に使うのよ」

「まあ、自分で稼いだお金ですから、好きに使っても誰も文句は言いませんし」

「それに、お店にとって売り上げが爆発的になるから、助かるぞ」

「口は災いの元ですわ」

委員長がパスタを食べ終え、ボツソと呟いた。

「ナギサも手伝ってくれ」

「嫌です」

ナギサ先生は笑顔で即答する。

「は・・・はは」

「あ・・・ああ」

その後、ナギサ先生にデザートも奢ってもらった。

お店の料理は美味しかったけど、それより美由紀さんの食べっぷりが印象に残った。

エヴァ Side

私はジジイに呼ばれた。用件は小僧と戦ってくれと言うことだった。引き受ける代わりに、条件を幾つか出した。

ナギサに関しての報告は過小評価にする事。

残りは万が一の場合はジジイが責任を取る事とか、他の裏の関係者を介入させるなどかだ。

贅沢を言えばナギサの魔法使いとしての試験を白紙にさせることと、メルディアナをナギサにかかわらせない事だが、この条件を出すにはまだ厳しい。

これから、ジジイは何かの問題をナギサと小僧に解決させるだろうから、そこからジジイが根回しした証拠とか、修行が白紙になるくらいの事件にさせるしかない。

そもそも、修学旅行前に小僧と戦ってくれと頼んだ時点で、修学旅行さきに問題が起きるからと言ってるようなものだ。

たしか、修学旅行先は京都、関西の過激派が何かを仕掛けるだろうから、詠春に貸しが作れる。

そんな事を考えて学園の外に出るとナギサが待っていた。

「おつかれ、学園長はなんて？」

「なぜ、お前が？」

「喫茶店で昼飯を食べた後、家に電話したらエヴァが学園長に呼ばれたって言ってたから、こっちに來たんだよ」

わざわざ戻ってくれてきたのか。

「そ、そうか……」

「どうした？」

「いや、なんでもない!!」

その後、ジジイに頼まれた事をナギサに話したら、ナギサが不機嫌になった。

「そんな事をやって、エヴァの風当たりは悪くなるんじゃないのか？」

「いまさらだ、闇の福音というだけで睨まれてるからな」

今更、連中の目を気にする事は全くないが、私の事を心配してくれるのは素直に嬉しかった。

「そういえば、騰蛇はどうした？」

何時もナギサの側に居る騰蛇とうだが居ないのは初めてだ。

「なんか、野暮用みたい」

「野暮用？」

神将に野暮用なんてあるのか？

「なんか知らんけど、ニヤニヤしてたからな」

「そうか、それより気になったのだが、紙将達は何時もどこに居るんだ？」

側に居る騰蛇とうだは兎も角、他の神将達は突然現れる。

「神界」

「そ、そうか・・・」

「神将達によると、神界以外にも上位世界は存在するらしい。ただ下界や他の世界に不可侵が原則、

神神将達のように俺みたいな人間に関わることは稀で、滅多にないそうだ

」

興味深い話になった。中でも気になったのは上位世界。

「神界以外にはどんな世界があるのだ？」

私は600年生きてきたが、神話以外で神の存在は京都の鬼神以外は知らなかった。

「異界、天界、魔界、妖精郷などがあるかな。他にもあるかも知れないけど、実際は不可侵が原則だから知る必要はないってのが現状

みたいだ。俺もよく知らないけど。ハッキリと言える事は人間が彼等の世界に簡単に干渉できないと言う事かな」

「なるほど」

人間は神界にいった話は殆んどない。調べればあるかもしれないが。逆に下界より上位存在が下界に関わる話はいくある。

「上位世界の存在がわかる話はアーサー王のエクスカリバーが有名なかな。

剣は湖の貴婦人に返還されたというから、今は妖精郷にあると信じられているし」

神将達にしても、かつて晴明の式神だった話もだったな。

「それを考えると、以外にとんでもない人生を送っているよな、俺って?」

自覚がなかったのか。まあ赤子の頃から関わっていたらそうなるか。

「そういえば、小僧のテストの結果はどうなった?」

ジジイが戦ってくれと頼んだと言う事は合格したが、点数が気になった。

「63点。本来なら教師をやるにはギリギリとか言ってたな。けどA組の教師には役不足すぎるという事で、A組の副担任だ」

「変わる図と言う事か。お前が担任になるのか？」

「辞退した。だから新しい教師が来る」

新しい教師か………まで。

「A組は三人の教師が就くのか？」

「ああ、理由はA組が起こす問題とか、試験結果とか。来るのは相当変わり者みたいだ」

「魔法関係者なのか？」

教師に関してはナギサの方が私より情報が速い。

「いや、無関係みたいだ」

「よく、ジジイが雇ったな」

ナギサは溜息つきながら話した。

「普通の教師数人が動いたんだよ。A組は優しくすると、高畑の時に見たいに自由すぎるし、

新田先生みたいに叱っても変わらないから、目には目を、変わり者には変わり者と言うことになったんだよ」

どんな理由だ！？

「学に関しては天才みたいだ。ただ性格がひん曲がってるから、問題が起きなければいいが……」

「あのクラスはどこに向かうんだ？」

ナギサと話した後は、一緒に食事したり、ショッピングを楽しんだ。食事に関してはナギサは食べた後だから紅茶だけだったが。

Side out

春休みが終わり新学期

「「「三年A組！！ナギサ先生っ！あんぐど、ネギ先生っ！
ってだれ！？」」」

お馴染みの子供先生以外に長髪の男も居たことで生徒達は驚いた。

「しずかにしろ。今日から、貴様らの担任になった柊清人だ。全員
いるな「はい、はい！ 質問！！」

朝倉が必死に声をあげるが。

「黙れ、俺達は出て行くから、着替えて身体測定をやって来い」
バツサリと斬った。

「あ・・・あの、きよと先生。少しは質問に答えていいかと・・・」

ネギはビクビクしながら、清人に言う。

「黙れ、酒のつまみ」

「さっ酒のつまみ?？」

（（上手い））

「時間は有限だ。効率よく使わんと後悔するぞ」

「で、でも、質問くらいは・・・」

「はぁ・・・このクラスに三人の教師が居る理由は貴様等の素行と成績が問題あるからだ。」

このガキたちでは手に負えないと判断され、俺が雇われる形となった。

本来なら、貴様等は強制送還だぞ」

清人先生がネギの方をみて答える。

ネギはその言葉にショックを受けたようだ。

「2学期までに、貴様等の素行や成績が良くならなかった場合は、この二人は問答無用で送還のうえ、俺が貴様等が高校に行くまで教師をしなければならなくなる。だから、貴様等は問題を起こすな」

ネギは問答無用の送還と言う言葉にショックを受け、顔色が悪くなった。

「俺たちの担当科目は殆んどの教科だ。三人でやるからわからない事があればこいつ等に聞け。」

俺は授業を進行するからな。話は終わりだ。出るぞ」

「はい」

「は・・・い」

こうして、新しい新学期が始める。

7話 つかの間の休息（後書き）

オリジナルキャラのオンパレードの回でした。

喫茶店のキャラは喫茶店が関わらない限り出番はありません。

柊清人^{ひいらぎ}《清人》先生に関しては、ネギの一般常識のなさの注意やA組の素行をハッキリと言える立場の人間が欲しかったため作ったキャラです。

ナギサがネギに注意するより、こちらのほうがいいと思ったので。

喫茶店のキャラの性格ややり取りのネタはゲームやアニメから拝借しました。

わかる人にはわかると思います。

なんせ・・・っとそれより、神界や天界、そして異界や妖精郷など作者の勝手な設定です。

とりあえず、神界以外にも存在していると言う事だけで、それらの住人？をだす予定はないのであしからず。他の神様は出す予定です。

誤字、脱字、感想や指摘は受け付けているので宜しくお願いします。

8話 桜通りの吸血鬼事件

ナギサ Side

新学期。俺達は副担任のままになった。

新しい担任の柊先生は口は悪いが、教え方は上手かった。
加えて、教科書をパラパラとみてその中身の内容を全て暗記した。

「天才⇨変人か・・・・・・」

俺がボソリと呟いた言葉を聞こえていたのか

「誰が変人だ、小僧」

「聞こえてたんですか？」

「聞かせたくないなら口にするな」

俺と柊先生は職員室で休憩している。

柊先生の胸ポケットが膨らんでいたの。

「柊先生はタバコを吸わないのか？」

俺は呼捨てのまま、質問をした。

「午後になるまでは吸わんようにしてる」

「クラスの子達をどう見る？」

俺がクラスの事を聞いた、丁度その時、タイミングよく新田先生が職員室に戻ってきた。

「ナギサ先生に柊先生も一緒だったんですか」

新田先生が声をかけてきた。

「黙れ、新田」

柊先生は突然、不機嫌になった。

「新田先生は柊に何かしたんですか？」

柊先生は明らかに新田先生を睨んでいる為、質問をしたが、新田先生ではなく柊が答えた。

「コイツは、学生時代からの知り合いだ」

「そうそう、もう一人中のいい奴がいてね、三人でよくつるんでい

たんだ」

「黙っている。貴様が俺を推薦したせいで、俺が教師をやる羽目になったんだ」

「そういうのは、断れるんじゃないですか？」

まさか、学園長が弱みを握って無理やりやらせているのか？　と思っ
ていたら。

「僕達の恩師に頼んだんだよ。柊はその人に頭が上がらないから」
新田先生が一枚かんでいたのか。短い休み時間は柊先生と新田先生
の話で直ぐに終わった。

エヴァの方は作戦通り生徒の一人を襲い、バカアニキに魔法関係の
事件だと思わせた。
しずな先生から昨晚桜道りに吸血鬼が出たと噂を聞き、バカアニキ
が調べ始めた。

今日の仕事が終わリ、一度帰宅してエヴァ達の行動を見ることにし
た。

エヴァはバカアニキが桜道りに入っただのを見計らって桜通りを通っ
た宮崎さんに襲った。

宮崎さんはいきなり近づいてきた事で驚き悲鳴を上げたが直ぐに気
絶した。

そうしたら、バカアニキがいいタイミングで文字通り飛んできた。

「アホ・・・？」

「全くだ。人払いをしているかするら確認しないで飛ぶか普通？」

「・・・・・・・・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3190p/>

ネギの弟は神様候補！

2011年6月30日23時09分発行